

青森県埋蔵文化財調査報告書 第273集

# 丹 内 遺 跡

－八戸南環状道路建設事業に伴う発掘調査報告－

2000年3月

青森県教育委員会



丹内遺跡正誤表

頁	行		誤	正
目次	16	訂正	土器について	土師器について
10	14	訂正	ピット13	ピット3
10	35	追加		出土した炭化材は放射性炭素年代測定を実施した(付編参照)。
16	2	訂正	II H・G-22・23グリッドに位置する。	II H・G-32・33グリッドに位置する。
32	12	訂正	出土土器を中心に二大別	出土土器を中心に二大別



# 丹 内 遺 跡

－八戸南環状道路建設事業に伴う発掘調査報告－

2000年3月

青森県教育委員会



## 序

新井田川は馬淵川とともに八戸市を流れる二大河川の一つで、その流域には多くの遺跡が所在することが知られております。縄文時代早期の赤御堂遺跡、縄文時代中期の松ヶ崎遺跡など、古くからよく知られた縄文時代の遺跡が多数あります。なかでも是川中居遺跡は、美術工芸的にも優れた遺物が出土することで全国的に有名な、晚期亀ヶ岡文化を代表する遺跡の一つです。中世の館跡、近世の経塚なども知られており、近年では新井田古館遺跡で近世の集落が発掘調査され、この地域の歴史が明らかになりつつあります。

丹内遺跡は新井田川の支流、松館川の右岸に位置しており、平成10年度に八戸南環状道路建設事業に先立って発掘調査が実施されました。古墳時代から平安時代にかけての集落が検出され、住居跡からは鉄器や琥珀が出土し、この地域の古代における生産・流通の一端がうかがわれます。そのなかでも、これまで馬淵川流域でしか検出されていなかった古墳時代の住居跡が検出されたことは、今後八戸の古代を語るうえで欠かせない資料であります。

本書はこの地域の歴史叙述に新たな一頁を付け加えるものです。上梓するに当たり、調査の実施、報告書の作成にお世話になった関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

青森県教育委員会

教育長 佐藤正昭



## 例　　言

1. 本報告書は、八戸南環状道路建設事業に伴い、平成10年度に発掘調査を実施した八戸市丹内遺跡の発掘調査報告である。
2. 本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は末尾に記した。
3. 出土した資料の自然科学的同定・分析等は下記の諸氏・諸機関に依頼した。

石器の石質鑑定 佐々木 長雄（県立八戸南高校教諭）

木材・炭化材の同定 パリノ・サーヴェイ株式会社

放射性炭素年代測定 （株）地球科学研究所

4. 依頼原稿は、編集の都合により書式を変更した部分がある。原文の意味を損ねることのないよう留意したが、それにより意味に異同が生じた場合はすべて編集者の誤解・過ちによるものである。
5. 本報告書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図の「三戸」「階上岳」および1/2,500八戸市都市計画図（1/3,000に縮小）である。
6. 本書を編集するに当たり次の方々・機関にお世話になった（順不同 敬称略）。

八戸市博物館 （財）岩手県埋蔵文化財センター 水沢市埋蔵文化財センター 秋田県立博物館 庄内昭男 佐藤良和 宇部則保 大野亨 佐々木浩一 小笠原善範 藤田俊雄



# 凡例

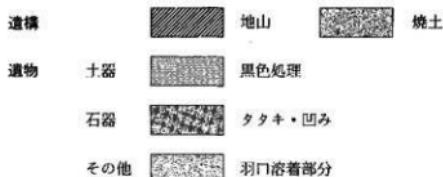
1 遺構の表記は青森県埋蔵文化財調査センターで定めた略号を使用している。当センターで定めた略号は以下の通りである。

S B	掘立柱建物跡	S D	溝跡	S E	井戸跡	S I	住居跡
S K	土坑	S N	焼土遺構	S Q	配石・集石遺構	S R	上器埋設遺構
S T	捨て場	S V	溝状土坑	S X	その他		

2 挿図中の北方位は、座標北である。

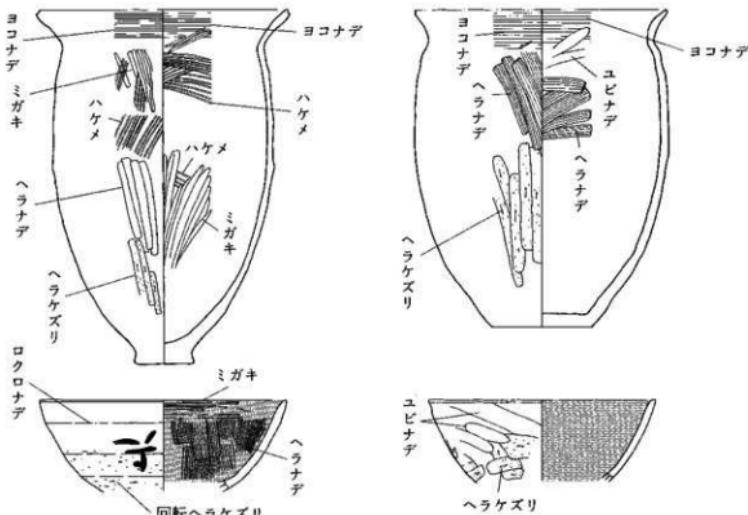
3 挿図の縮尺は、各挿図にスケールとともに示した。ただし、座標の表示のあるものについてはスケールを示していない場合がある。

4 挿図中で用いたスクリーントーンの指示は次の通りである。



5 繩文原体の表記は『日本先史土器の縄文』(山内清男、1979年)に従った。

6 挿図中で用いた上器の表現は下図の通りである。



7 遺物写真の縮尺は断りのないかぎり約1/3である。異なる場合は( )内に、またはスケールで示した。



# 目 次

序

例言

凡例

目次・挿図目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡周辺地域の地形・地質	4
第3章 検出された遺構と遺物	8
第1節 古代の遺構と遺物	9
第2節 古代以外の遺構と遺物	21
第4章 遺構外出土遺物	25
第5章 考察	30
第1節 土器について	30
第2節 青森県の古代の琥珀について	32
第3節 石製品について	34
引用・参考文献	35
付編 自然科学的分析	
八戸市丹内遺跡の材同定 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	36
放射性炭素年代測定結果 ((株) 地球科学研究所)	38
写真図版	41
抄録	



## 挿 図 目 次

- 図 1 遺跡位置図
- 図 2 グリッド配置図
- 図 3 遺跡付近の地形面区分図
- 図 4 土層断面柱状図
- 図 5 遺構配置図
- 図 6 第1号住居跡
- 図 7 第2号住居跡
- 図 8 第2号住居跡出土遺物(1)
- 図 9 第2号住居跡出土遺物(2)
- 図 10 第3・4号住居跡
- 図 11 第5号住居跡
- 図 12 第5号住居跡出土遺物
- 図 13 第7号住居跡
- 図 14 第1号土坑
- 図 15 不明遺構
- 図 16 第2号土坑・溝状土坑・焼上
- 図 17 第1号溝跡(1)
- 図 18 第2号溝跡(2)
- 図 19 遺構外出土遺物(1)
- 図 20 遺構外出土遺物(2)
- 図 21 出土土師器集成図

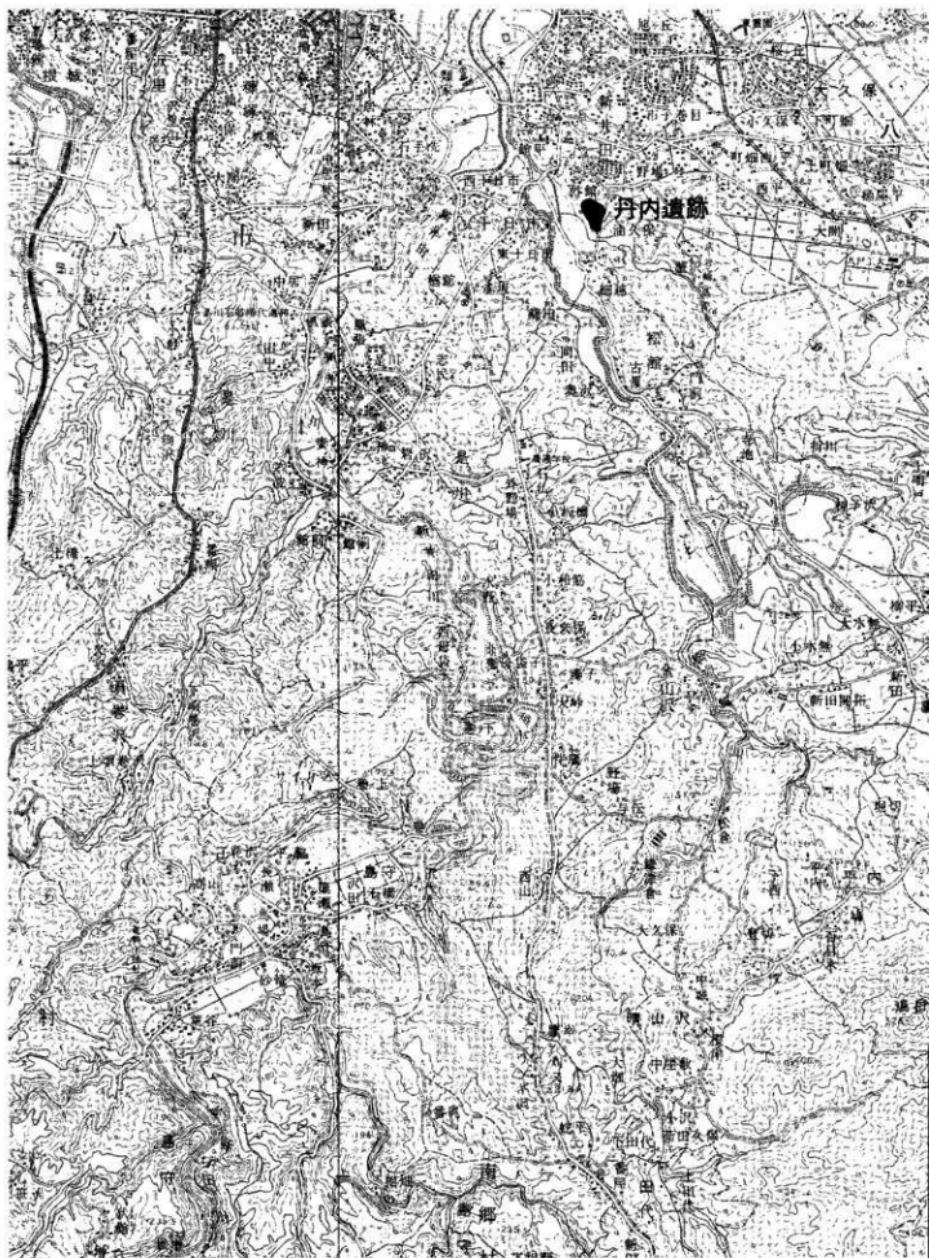
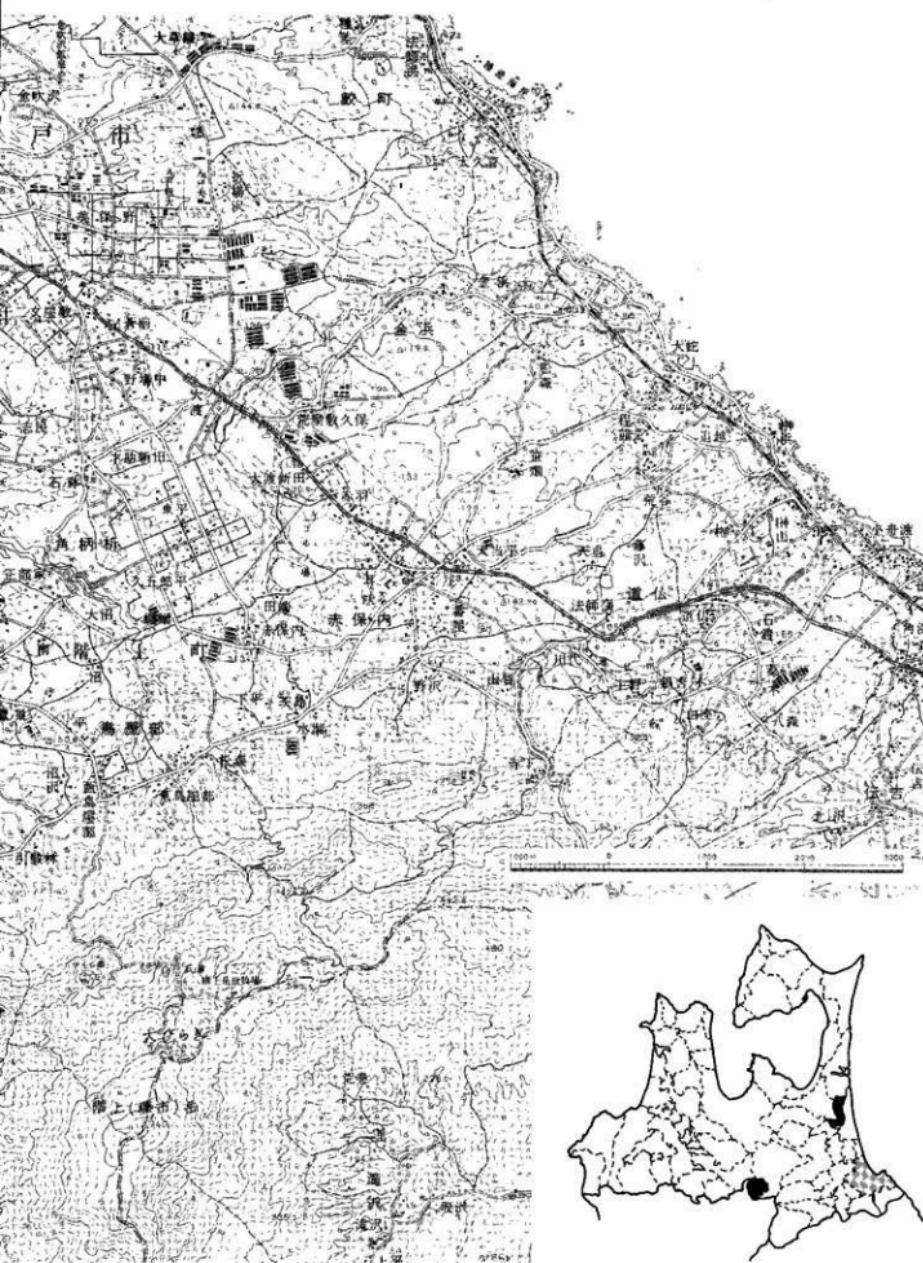


図1 遺跡位置図



(S = 1 / 50,000)



# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査要項

### 1 調査目的

八戸南環状道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する丹内遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2 発掘調査期間

平成10年4月27日（月）から同年6月12日（金）まで

### 3 遺跡名及び所在地

丹内遺跡（青森県遺跡台帳番号 03-173）

八戸市大字妙字丹内1-1-4外

### 4 調査面積

2,300平方メートル

### 5 調査委託者

建設省東北地方建設局青森工事事務所

### 6 調査受託者

青森県教育委員会

### 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関

八戸市教育委員会

### 9 調査体制

調査指導員 市川金丸 青森県考古学会会長

調査協力員 卷 長倍 八戸市教育委員会教育長

調査員 松山 力 八戸市文化財審議委員（地質学）

調査員 工藤竹久 八戸市教育委員会文化課主幹（考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島 邦夫

次長 成田 誠治

総務課長 成田 孝夫

調査第二課長 福田 友之

文化財保護主事 中村 哲也、齋藤 正

調査補助員 福士忠博、佐藤公子、長浜久美子、秋田谷恵美

## 第2節 調査の方法

**グリッドの設定** 調査開始前に工事用の路線図上に、国土調査法・平面直角座標第X系に基づく4m四方のグリッドを設定した。小数点以上の下二桁が00となる点を基準とし、遺跡全体を含むように設定した。この結果、グリッドの基点はX=53,300m Y=59,000mとなった。

X軸をローマ数字とA～Yのアルファベットの組み合わせで、Y軸を算用数字で表し、上記基点をIA-0とした。X軸・Y軸ともに正の方向に4m進むとIA、IB、IC…・0、1、2、3…のように進んでいく。アルファベットがYまで進んだ場合、I Y→II Aのように、ローマ数字が進む。

グリッドの名称は南西隅のグリッドライン交点を以て表した。

現地では、重機による表土除去後、工事用路線杭の座標から第X系のX軸を割り出し、グリッド杭を設置した。グリッド杭は基本的に20mごとに打ち、その後必要に応じて追加した。

B. M. の移設 ベンチマークは松館川対岸の段丘上に設置された3級水準点(37.148m)から移設し、調査区内に適宜設置した。

**遺物包含層の掘進と遺物の取り上げ** 表土を重機で除去した後、遺物包含層(第II層: 第2章参照)は手作業で掘り進めた。しかし結果として、遺物包含層が極めて薄く、かなりの部分に削平・攢乱が及んでいることがわかった。そのため、遺物の取り上げはI(表土)・II層を一括した場合が多い。

**遺構の精査** 土坑は二分法、住居跡は四分法を基本とした。遺構内の堆積土は算用数字をもって表記した。遺構名は種別ごと、検出順に付し、調査後攢乱と認められたものや別種の遺構と判断されたものは欠番として扱った。

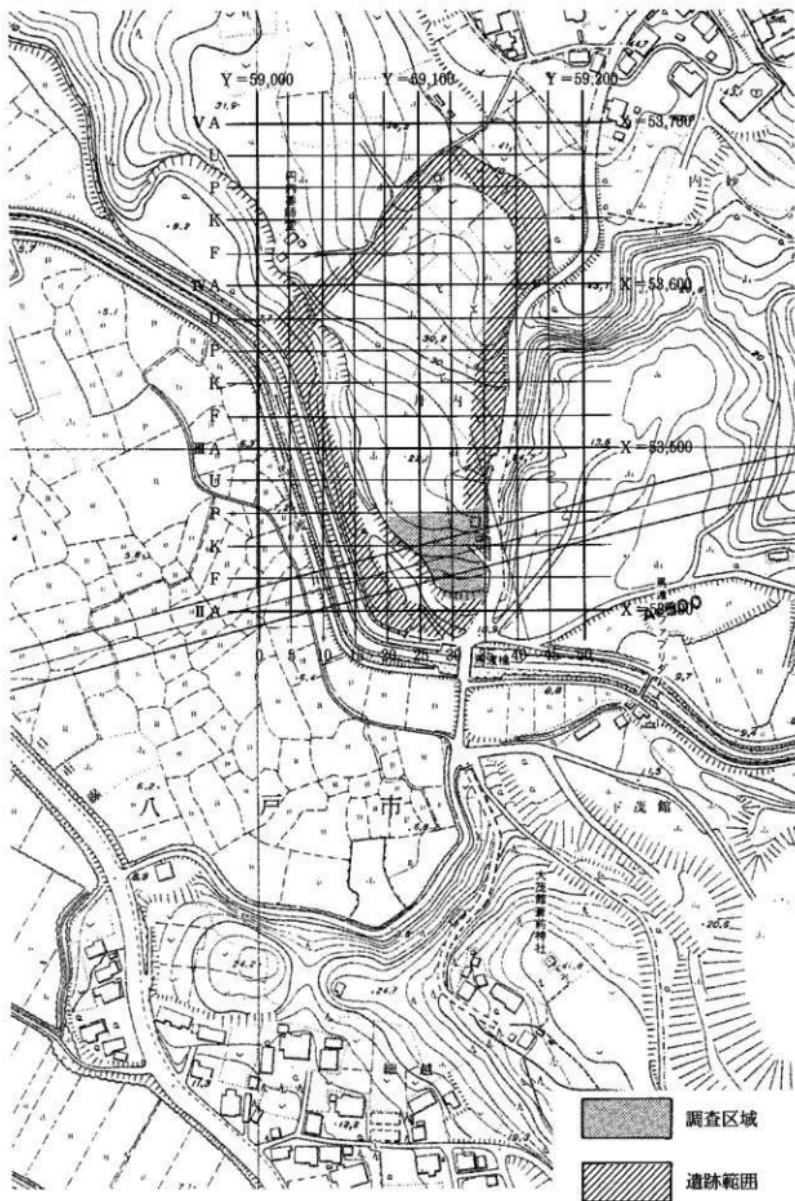
**実測図の作成** 実測図は簡易遺方法を採用した。実測図の縮尺は1/20を基準とし、必要に応じて1/10を採用した。

**写真撮影** 写真撮影は35mmモノクロフィルムとリヴァーサルフィルム(いずれもISO400)を使用し、補助的に35mmカラーネガフィルムを使用した。

## 第3節 調査の経過

4月24・25日、重機により表土を除去。4月27日、機材搬入。4月28日、グリッド杭打設。包含層の掘進を開始。5月6日、ベンチマークの移設を開始。5月7・8日、包含層の土層を検討。調査区の大部分で包含層が極めて薄く、削平・攢乱が広範囲にわたっていることを確認。5月15日、遺構が確認され始める。5月18日、第1号住居跡(SI01)調査開始。残存状況が悪いことが判明。以後、遺構が検出され始めるが、その大半は残存状況が悪いものであった。6月12日、精査を終了し、蟹沢(2)遺跡に発掘調査機材を運搬した。

(中村 哲也)

図2 グリッド配置図 ( $S = 1/3,000$ )

## 第2章 遺跡周辺地域の地形・地質

八戸市文化財審議委員 松山 力

### 1. 遺跡の位置と周辺の地形

丹内遺跡は、北緯 $40^{\circ} 28' 47''$ 、東経 $141^{\circ} 31' 50''$ の地点を中心とする緩傾斜の小規模な段丘面上に位置している。この段丘の南縁には南東から下る馬渡川が流れ、遺跡の西北西方約500mで南南東から下る松館川に合し、松館川は遺跡の北東方1km余りの地点で、主流の新井田川に合流する。

新井田川は岩手県平庭岳付近に源流を発し、南～南西方の丘陵・段丘群（洪積台地）を割り抜くように屈曲しながら流下し、西方の松館川合流点付近から開ける幅およそ2kmの沖積地東縁を北上し、遺跡の北方約5.5kmで八戸湾に注ぐ、流路延長およそ85kmの二級河川である。松館川は階上岳南方に源流を発し、階上岳の西麓をまわって新井田川の東方を並行するように北上する河川で、沿岸には狭長な谷底平野が断続している。新井田川との合流点の南側には著名な赤御堂貝塚がある。

周辺地域の段丘は、最高位の九戸・蒼前平岡段丘、高位の天狗岱段丘（白銀平段丘、野場段丘）、中位の高館段丘（湊段丘）、低位の根城段丘、最低位の田面木段丘などに区分されている。

図3は遺跡を中央においた東西5.5km、南北4kmの地形区分図である。この範囲内における各段丘面の高度（標高）は、蒼前平段丘が100m以上、白銀平段丘が80～110m、野場段丘が60～80m、高館段丘が30～70m、根城段丘が20～40m、田面木段丘が10m以上である。沖積段丘は、田面木段丘と区別しにくい上位段丘を田面木段丘に含め、その他は一括して沖積地に含めた。傾斜地については地表面の傾斜角10°前後以上を急傾斜地とし、それより緩傾斜の部分は遷移する段丘の段丘面に含めている。なお遺跡周辺には、沖積面まで丘陵・段丘縁を削り込んだ粘板岩や石灰岩の採取地が点在しているので、その部分を旧地形に復元して区分図を作図した。

蒼前平段丘と、天狗岱段丘群を構成する白銀平・野場両段丘は、天狗岱火山灰以降の火山碎屑物をのせる段丘で、新井田川～馬渡川の北東では平坦面がよく残されているが、西～南方では開析が進んでいて、ゆるやかな起伏部や緩傾斜の部分が細長く残されているだけの平頂丘陵地となっているところが多い。なお、図3の範囲内では、白銀平段丘の高度（標高）75～80mの部分に明瞭な段差数m程度の段丘崖が認められるところが多いので、上位面と下位面の二つに分けた。

高館段丘は高館火山灰以降、根城段丘は高館火山灰の中位以降の火山碎屑物をのせる段丘で、緩やかな起伏地が多い。図内の十日市付近と、北側の外に続く八戸湾岸までの高館段丘には、高度40～50mの間に傾斜のやや大きい斜面が断続し、低い側に起伏の少ない平坦面が広いのに対して、高い側はやや勾配が大きいか、緩傾斜の起伏地となっているところが多い。大和伸友（1988）は馬淵川流域で低い方をあかね段丘、高い方を鳥沢段丘と呼んで区別したが、第3図では区別を省略した。

根城段丘は緩傾斜の起伏が多い段丘で、図の西端の石手洗付近で広いが、その外は比較的幅が狭い緩傾斜地となっているところが多い。遺跡をのせる段丘は根城段丘に相当する。

田面木段丘は、八戸火山灰以降の堆積物をのせる段丘、沖積上位段丘は八戸火山灰以降に形成された段丘であるが、その分布は局地的である。

### 2. 地質の概要

遺跡を含む周辺地域の基盤は、新井田川の東側と、西側の一部地域は先第三系、新井田川の西側の大部分はおもに第三系の堆積岩類で構成され、これらを第四系の堆積物が覆っている。

周辺の第三系堆積岩類は、おもに粘板岩、砂岩、チャート、石灰岩、塩基性凝灰岩（いわゆる輝緑凝灰岩）などである。直近地域には火成岩類はみられないが、東方の太平洋岸には塩基性凝灰岩や砂岩中に古期安山岩や輝緑岩が貫入しており、南方の階上岳山体は花崗閃緑岩を主としている。

基盤にのる第四系は、おもに礫・砂・泥などの水成段丘堆積物と、これらを覆う粘土質褐色火山灰類（ローム）を主とする火山碎屑物とで構成され、最上部は地表直下の黒色土（クロボク、腐植土）層に漸移し、黒色土層群には完新世（沖積世）の降下火山碎屑物が挟在する。

周辺地域の第四紀火山碎屑物類は火山灰や軽石、火山岩片などで構成され、古い方から更新世（洪積世）の天狗岱火山灰層、高館火山灰層、八戸火山灰層、完新世（沖積世）の南部浮石層、中搬浮石層、十和田b降下火山灰層、十和田a降下火山灰層、苦小牧火山灰層などに分けられ、天狗岱火山灰層や高館火山灰層の大部分、八戸火山灰層の最上部は、ローム化した褐色火山灰となっている。天狗岱火山灰層の大部分は八甲田火山群起源、高館・八戸両火山灰層はほとんどは十和田火山起源であるが、北海道の洞爺火山や鹿児島県の姶良火山などの火山灰が挟在し、確認できる最新の火山灰としては朝鮮半島基部の白頭（ベクト）山起源の苦小牧火山灰層が黒色土層中に点在する。

丹内遺跡の十台は先第三系の砂岩と粘板岩で、その上に砂礫層と高館火山灰層中部以上の火山碎屑物がのっているものと思われ、発掘によって高館火山灰層の最上部から八戸火山灰層までが確認され

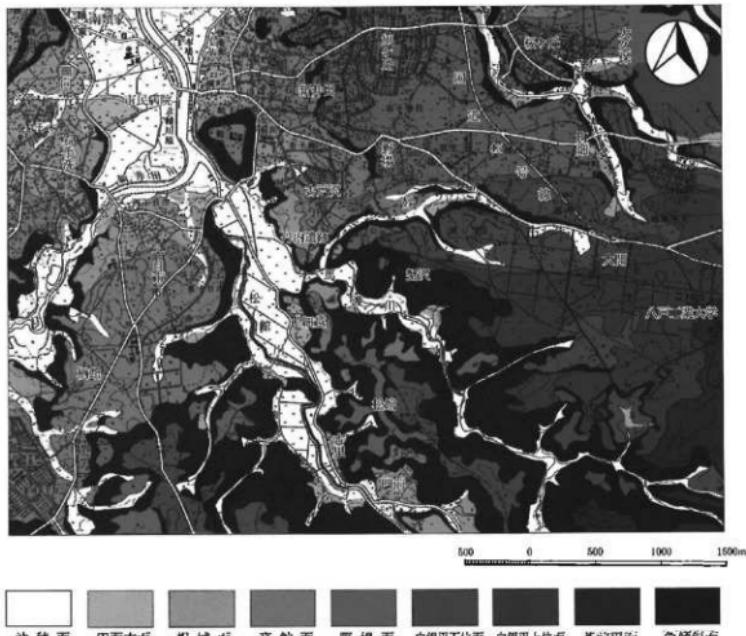


図3 遺跡付近の地形面区分図

ている。南部浮石と中揮浮石および十和田b降下火山灰は成層部は失われているが、その軽石粒（中揮浮石は砂粒大）は土層中に密に、あるいはまばらに混じって存在する。

### 3. 遺跡の層序

遺跡の層序は、図4の土層柱状図に代表されるように、黒色土層群と火山灰層に大別された。黒色土層群は上から下へ、I層、IIa層、IIb層、III層の4層に区分され、さらにIIb層はいくつかに細分されている。また、火山灰層はIVa～d層、V層の5層に分けられた。

I層は厚さ10～15cmの黒色(10YR 2/1)土層で、大部分は耕作土に当たる。砂質で粘性に乏しく、粒径2～5mmの堅い浅黄橙色(10YR 8/3～4)軽石粒がやや多量に混じっている。

IIa層は厚さ8～15cmの黒褐色(10YR 2/2)土層で、粒径2～4mmの堅い灰白色～浅黄橙色(10YR 8/2～4)軽石粒が散らばっている。この軽石粒はI層の軽石粒とともに、十和田b降下火山灰に由来するものである。

IIb層は、厚さがふつうで40～60cmの土層で、柱状図作成地点で次のような4層に区別できた。最上部は厚さ10～20cmの黒色(10YR 2/1)土層で、やや粘土質である。粒径2～10mmの灰白色～浅黄橙色(10YR 8/2～4)軽石粒が散らばっている。その下はやや粘土質の黒褐色(10YR 3/1)土層で、厚さが8～18cm、粒径2～10mmの灰白色～浅黄橙色～黄橙色(10YR 8/2～6)の軽石粒がやや多量に含まれている。この軽石粒は南部浮石に由来するものである。上から3番目は厚さ10～20cmの引き締まった黒褐色(10YR 3/2)土層である。粘性に富むがやや砂質で、上位層同様の軽石粒がまばらに散っている。最下部は厚さ5～15cmの上層で、色調が上から下へ暗褐色(10YR 3/3)からにぶい黄褐色(10YR 5/4)へと遷移する。砂混じりながら粘土質でしまって硬く、粒径2～6mmの灰白色～浅黄橙色(10YR 8/2～4)軽石粒が散らばっている。

III層は厚さ12～25cmの、火山灰から腐植土への漸移土層で、上から3分の2～4分の3ほどは砂質の褐色(10YR 4/4)土層、下部はにぶい黄褐色(10YR 5/4)火山灰層(ローム)となっている。III層には、ところによってまばらに、ところによってはやや多量に、八戸火山灰に由来する粒径2～8mmの灰白色(10YR 8/1～2)軽石粒が混じっている。

IVa～d層は降下相の八戸火山灰層で、大池・松山・七崎(1970)は、下からI～VIの6層に分けている。大池等と遺跡層序の略号が紛らわしいので、大池等の略号は〔 〕で囲んで示す。

IVa層は[VI層]に相当する厚さ35～40cmの軽石層で、上部の浅黄橙色軽石(ふつうの粒径2～5mm～大粒は8～20mm)層と灰白色粗粒砂大火山灰との互層、中部の粒径が粗粒砂大から20mmの灰白色軽石層、下部の粗粒砂大～粒径4mmほどの灰白色粗粒火山灰層の3層に識別できる。

VIb層は[V層]に相当する厚さ30～35cmのシルト様灰黄色(2.5Y 7/2)火山灰層で、中央部に粒径3～20mmの灰白色軽石粒が列をなすように並んでいる。

IVc層は、[IV層]に相当する粒径4～20cm(最大4cm)の硬い灰白色軽石が密集した厚さ10cm前後の灰白色軽石層で、粒径3～6mmの褐灰色(10YR 5/1)火山岩片が多量に混じっている。

IVd層は[III～I層]に相当する軽石層混じりの火山灰層である。大池等の分層に従えば、[III層]は厚さ3～5cmの粘土質火山灰層、[II層]は粒径2～30mmの硬い灰白色軽石が密集した厚さ2～3cmの軽石層、[I層]は厚さ50cm前後の灰白色火山灰層で、数列の薄い軽石層(粒径2～1.5cm)を挟んでいる。

V層は、粘土質の褐色火山灰を主とする高館火山灰層（ローム層）で、発掘調査では最上部の炭質物の多い風化帯に当たる厚さ10cm程度のみを確認したにとどまった。

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会、1998. 弥次郎庭遺跡II. 青森県埋蔵文化財調査報告書、第238集.  
 大池昭二・松山 力・七崎 修、1970. 八戸平原地区地質調査報告書. 東北農政局計画部  
 八戸市教育委員会、1987. 赤御堂遺跡. 八戸市埋蔵文化財調査報告書、第33集  
 松山 力・大池昭二、1986. 十和田火山噴出物と火山活動. 十和田科学博物館、第4号  
 大和伸友、1988. 馬淵川流域の段丘地形. 駒沢地理24.

## 付記

調査区内で、上記のような土層が全て認められたのはII O-28グリッド付近だけである。他は、II b層下部が欠落しており、また、II a層・II b層上部の発達も悪く、土層柱状図作成地点に比べてより砂質である。表土から遺構確認面までの土層を連続して確認したSI-5付近においてもII b層は欠落している。これは、遺跡付近の地形・気象が関係している可能性を考えられる。また、調査区の大部分でII a層が発達していないのは、削平を受けたものと考えられる。II O-28~30グリッドからII L-29グリッドにかけては、III層上面で小規模な谷地形が認められ、この付近のみ黒色土の残存状況が良かったものと考えられる。

以上のような状況をふまえてII O-28グリッドで土層柱状図を作成したが、遺物の取り上げの際にはII層の細分層は記録しなかった。（中村）

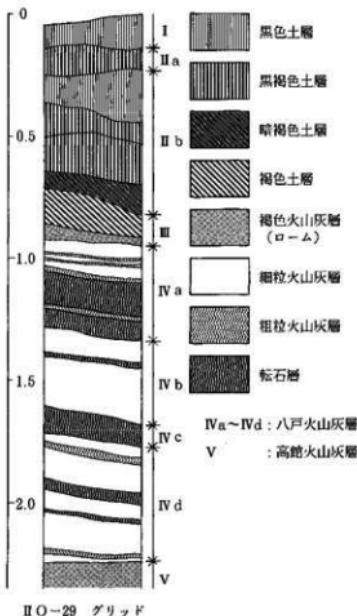


図4 土層断面柱状図

## 第3章 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、住居跡(SI) 6軒、溝跡(SD) 1条、土坑(SK) 2基、焼土(SN) 3基、不明遺構(SX) 1基、溝状土坑(SV) 2基である。このうち、住居跡・土坑1基・不明遺構は古代のものと考えられる。不明遺構は野外調査時にはSI08として扱ったが、整理時の検討の結果、SX01として報告することとなった。ただし、遺物注記や遺構原図の表記は野外調査時の表記のままである。

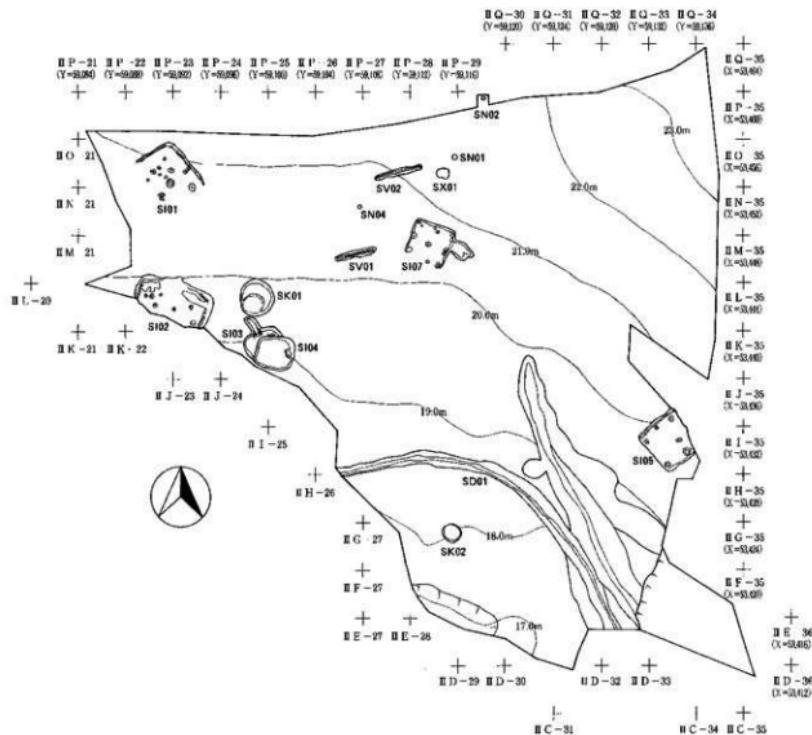


図5 遺構配置図 (1/400)

## 第1節 古代の遺構とその出土遺物

第1号住居跡 [SI01] (図6、写真1-3~3-8、20)

[位置] II M・N-22・23グリッドに位置する。

[確認] IV層中で確認した。

[重複]認められなかった。

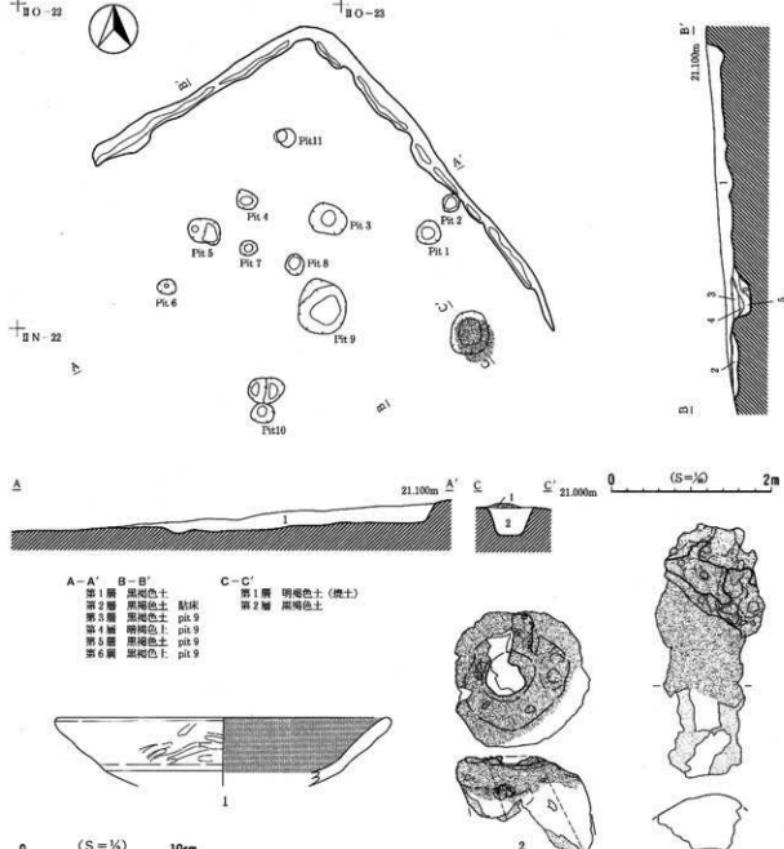
[平面形・規模]方形を呈すると思われるが、南東辺・南西辺の掘り方は削平を受けたと思われ、確認  
+ II O-22 + II O-23

図6号	遺構名	出土層位	埋 別	器 様	外 因 素 等	内 因 素 等	分類
6-1	SI01	粘土2層	土師器	杯	1ガキ	1ガキ	1a

図6 第1号住居跡 (SI01)

されなかった。もっとも残りのよい北東辺で長さ4m70cmをはかる。

[壁・床面]壁は残存状況が悪く、もっとも残りの良い北隅で高さ23cmである。北半は、第IV b層を床面としていたため堅緻であった。南半は第IV a層（八戸火山灰最上層の浮石層）が地山で、黒色土を貼床としていた可能性もある。しかし、地山上に堆積した黒色土は砂質で粘性がなく、硬化面は確認できなかった。

[周溝]深さ1～2cm程度の、周溝様の極めて浅い凹みが検出された。

[ピット]掘り方内と思われる範囲から12個のピットが検出された。ただし、堆積土・床面の残存状況が悪く、全てが本住居跡に伴うかどうか不明である。ピット12が主柱穴と思われるが、対応する位置には柱穴が確認されなかった。

[カマド]掘り方南東辺と思われる辺りに焼土が検出され、周辺に20～30cm大の粘板岩が認められた（写真1-3）。カマド火床面の可能性がある。

[堆積土]黒色土の単層である。粒径の粗い砂質シルトで構成されていた。

[出土遺物]1は坏片である。内外面に段・稜を有し、段から口縁部までは外傾して直線的に立ち上がる。古墳時代の土器と考えられる。ピット13からは、内外面ともケズリの施された土師器片・鉄滓が出土した。ピット9・10からは鉄滓が出土した。堆積土中からは内外面ともハケメの施される土師器片、ヘラナデの施される甕片や外面ミガキ・内面ハケメの施される土師器片、ヘラナデの施される土師器片、琥珀片2（写真2-5・20）、鉄滓（椀型鉄滓の破片を含む）、羽口（2・3）が出土している。羽口は全面被熱している。本住居跡から出土した鉄滓の総重量は7.4kgである。

[時期]本住居跡に明確に伴う遺物がないため不明である。

（中村）

## 第2号住居跡 [SI02]（図7～9、写真3-9～7-20、20～22）

[位置]II K・II L-22・23グリッドに位置する。

[確認]Ⅲ層中で確認した。

[重複]認められなかった。

[平面形・規模]方形を呈すると思われるが、粘板岩採取のための掘削により、南側大半を欠いている。北辺では長さ6m00cmをはかる。

[壁・床面]第IV層を床面とする。特に硬化した面は確認されなかった。壁高は最大で約55cm、やや斜めに立ち上がる。

[周溝]深さ約2cmの周溝様の極めて浅いくぼみが検出された。

[ピット]床面から7個のピットが検出されたが、位置・規模からピット1とピット6が主柱穴と思われる。

[カマド]北壁中央で検出された。粘板岩の板石を用いて壁体を構築しており、煙道部は燃焼部から急傾斜をもって立ち上がる。カマドから甕（2点）・瓶（1点）・坏（1点）が出土した（写真5-15）。

[堆積土]黒色土の単層である。

[炭化材]床面より数cm上位で炭化材が検出された。焼土は炭化材の下に若干認められた。焼失住居と考えられる。

[出土遺物]1は内外面に段を有する坏である。外面の段より上位は内窓気味に立ち上がる。内面の段

付近は、縦方向の強いミガキが顕著である。底部は丸底である。2は外面とも稜を持たず、底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる器形である。底部は分厚く突出しており、ケズリ出された段が残る。丸底の坏を志向したものと考えられる。3～8は長胴甌である。胴部中位に最大径のあるもの(5～7)、下膨れのもの(3・4)がある。8は胴の膨らみが強いが、球胴甌とされるものほど膨らみは強くない。いずれも調整はハケメ・ミガキである。9は瓶である。底部から口縁部まで外傾しながら直線的に開く。無底式である。11は土製の紡錘車である。カマドの東側の脇、壁際から出土した。カマド外の遺物はほとんどが主穴(ピット1とピット6)を結んだ線よりも、カマド寄り、床面や炭化材よりも上位で出土した。(写真5-1d)。その他に無調整のロクロ坏(10)・砥石(12)が堆積土中から出土した。

[時期]出土した土器の特徴から古墳時代の住居と考えられる。

(中村)

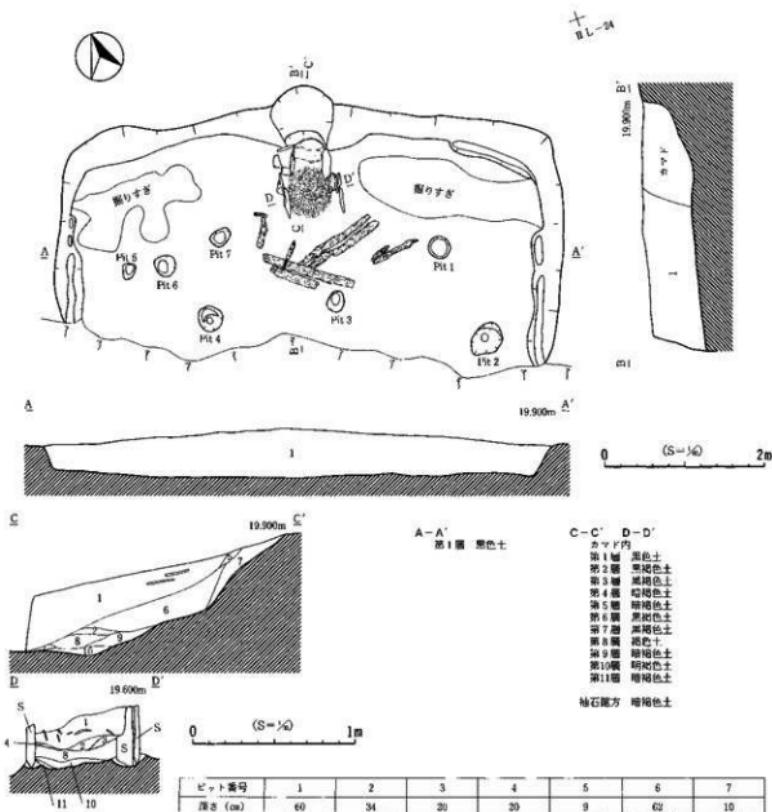


図7 第2号住居跡

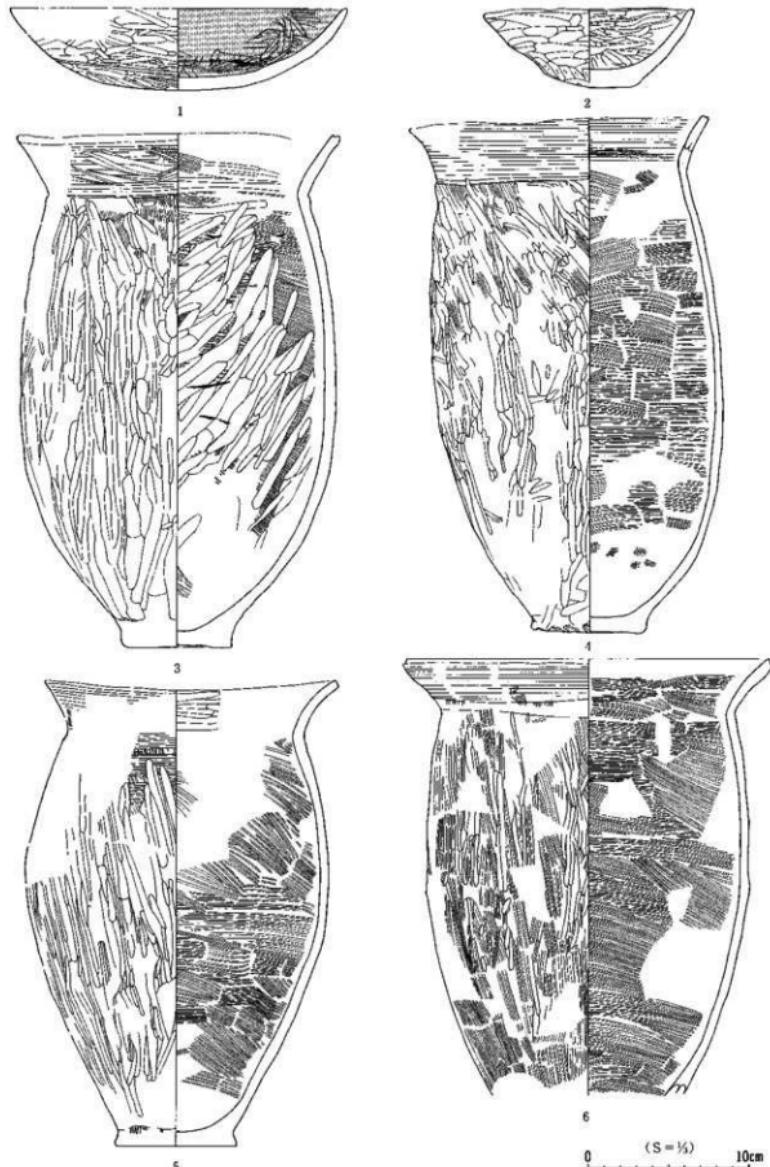
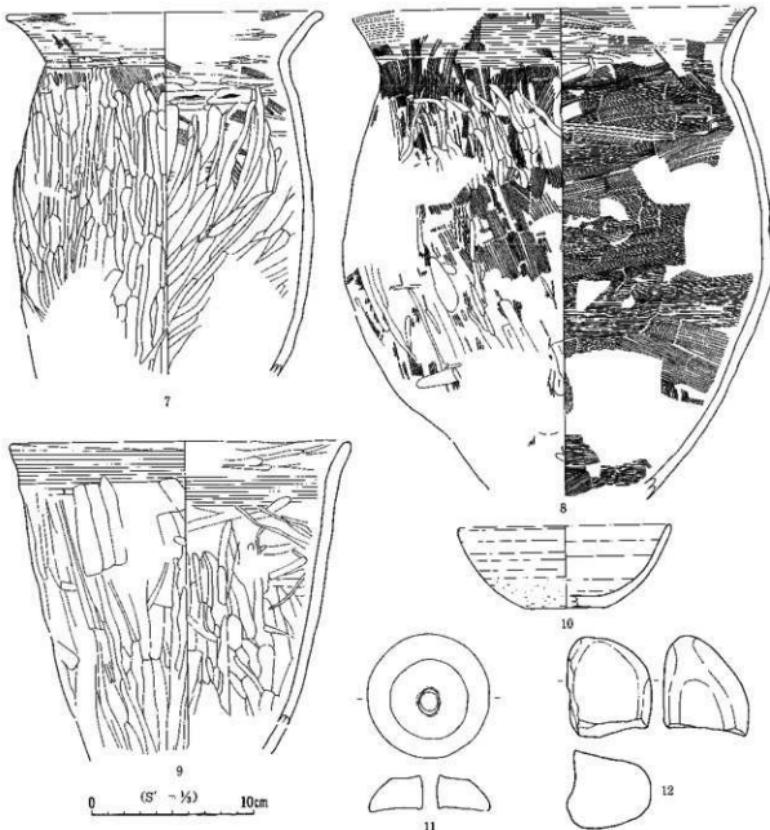


図8 第2号住居跡出土遺物（1）



発掘番号	通称名	出土場所	種別	基盤	外因調整等	内因調整等	分類	
8-1	S102	1層	土器部	砂	ミガキ	ミガキ	1 b	
8-2	S102	カマド1層	土器部	砂	体面ミガキ→底面ヘラケズリ	ミガキ	1 c	
8-3	S102	カマド1層	土器部	砂	ハケメ→口縁部コナテ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	1 b	
8-4	S102	カマド1層	土器部	砂	ハケメ→口縁部コナテ→ミガキ	ハケメ→口縁部コナテ	1 b	
8-5	S102	カマド付近	土器部	砂	ハケメ→口縁部コナテ→ミガキ	ハケメ→口縁部ミガキ	1 a	
8-6	S102	1層	土器部	砂	ハケメ→口縁部コナテ→ミガキ	ハケメ→口縁部コナテ	1 a	
9-7	S102	カマド1～3層、SI 3段直	土器部	砂	ハケメ→口縁部コナテ→ミガキ	ハケメ→口縁部コナテ→ミガキ	1 a	
9-8	S102	カマド付近	土器部	砂	ハケメ→口縁部コナテ→ミガキ	ハケメ→口縁部コナテ→ミガキ	1 c	
9-9	S102	カマド1層、3層	土器部	砂	口縁部コナテ	ミガキ→ミガキ	b	
9-10	S102	1層	土器部	砂	ロクロナデ	底面ヘラケズリ	ロクロナデ	
発掘番号	通称名	出土場所	種別	基盤	計測値	分類		
9-11	S102	1層	粘土鉢		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
					7.5		2.1	110.0
発掘番号	通称名	出土場所	種別	基盤	計測値	分類		
9-12	S102	1層	瓦石		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
					6.2	5.3	4.4	191.0

図9 第2号住居跡出土遺物(2)

## 第3号住居跡 [SI03] (図10、写真7-21~10-28、22)

[位置] II J・K-24・25グリッドに位置する。

[確認] III層中で確認した。

[重複] 第4号住居跡と重複し、本遺構が占い。

[平面形・規模] 方形を呈すると考えられる。北西辺で長さ3m20cmをはかる。

[壁・床面] III層を床面とするが、特に硬化した面は認められなかった。壁は残存状況が悪く、高さ15cm前後である。

[周溝] 検出されなかった。

[ピット] 床面から2個のピットが検出された。規模が小さいため、主柱穴であるか否かは不明である。

[カマド] 北西壁中央に検出された。粘板岩の板石を立てて、袖としていた。煙道部は1m65cmの長さで延びる。

[堆積土] 黒色土の単層である。

[出土遺物] 1は外面に沈線を施す壺である。底部は平底となっている。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。2は外面ミガキ・内面ハケメを施す甕。3・4は石製品である。3は左側縁に風化面を残している。右側縁は敲打によって打ち欠いたものとみられ、擦りによる整形痕は見られない。上端に貫通孔が見られるが、貫通孔の一部が欠損している。4の側縁には風化面、擦りによる整形痕は認められず、敲打により整形されている。いずれも片面から穿孔している。

[時期] 出土した土器によって8世紀代と考えられる。

(中村)

## 第4号住居跡 [SI04] (図10、写真7-21・22、10-28~11-32、22)

[位置] II J-24・25グリッドに位置する。

[重複] 第3号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

[確認] III層中で確認した。

[平面形・規模] 東西3m22cm、南北2m74cmの長方形を呈する。

[壁・床面] III層を床面としている。壁は残存高20cm内外である。

[周溝] 検出されなかった。

[ピット] 検出されなかった。

[カマド] 東壁中央部に粘土混じりの堆積土が認められ、完掘したところ、南北78cm、東西64cmの掘り込みが検出された。

[堆積土] 5層に細分された。

[出土遺物] 堆積土中から鉄製の鎌(7)・土師器片(5・6)・石製品(8)が出土した。カマド2層中から炭化し、破碎されたクルミ殻片が出土した。

[時期] 本住居跡に伴う遺物がないため不明である。

(中村)

S103 ピット計測表

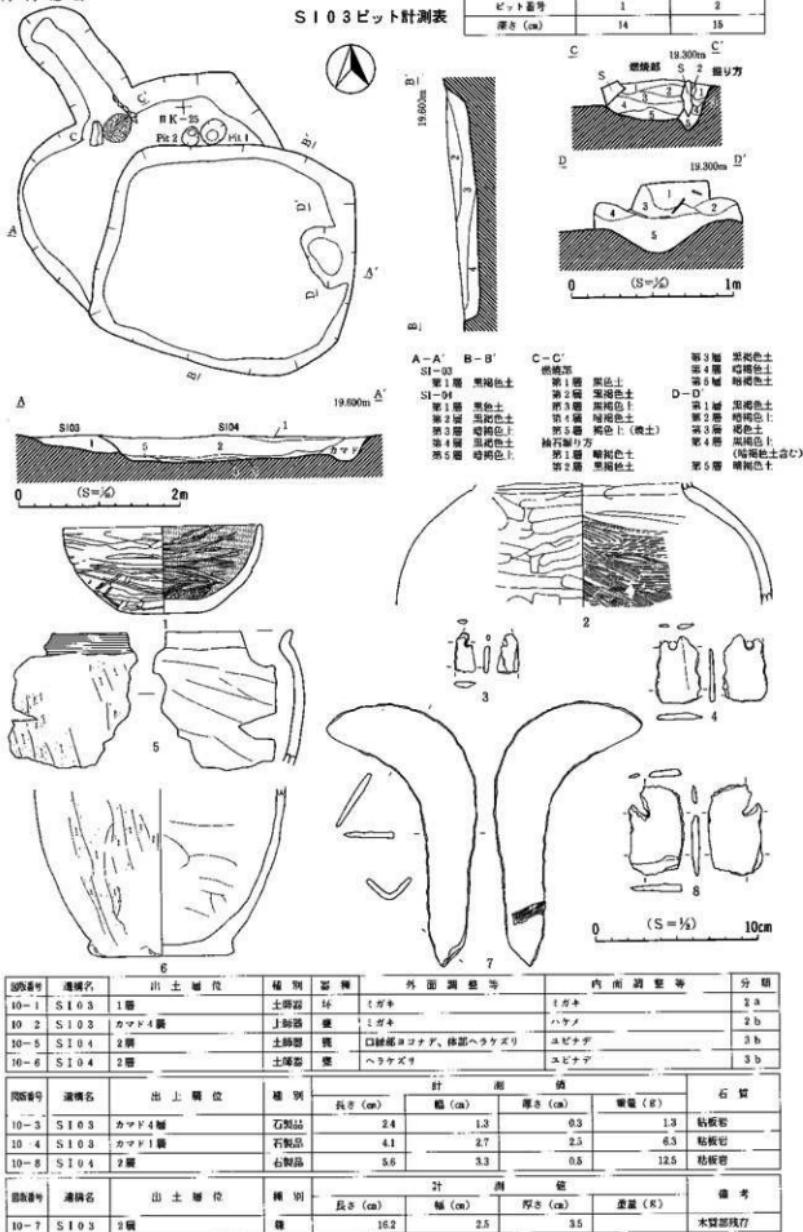


図10 第3・4号住居跡

## 第5号住居跡 [SI05] (図11・12、写真11-32~12-36、22・23)

[位置] II H・G-22・23グリッドに位置する。

[重複]認められなかった。

[確認] III層中で確認した。

[平面形・規模]方形を呈する。北東壁は現代の通路で掘削を受けている。

[壁・床面]南西側1/3は掘り方の埋め土を床面としている。東側に擾乱が認められた。

[周溝]検出されなかった。

[ピット]床面上から6個のピットが検出された。ピット1・2・3・5が支柱穴と思われる。

[カマド]検出されなかった。

[堆積土]7層に細分された。上層にはB-TmとTo-aが認められた。

[出土遺物]土師器壺5点、甕4点、須恵器片が出土した。2はロクロ使用の壺で外面に「犬」の墨書がある(写真23)。5は非ロクロの壺である。底径が比較的大きい。3は焼成は堅く、色調は赤褐色を呈する無調整のロクロ壺である。9~11は叩瓶の破片。9は底部付近の破片で丸底を呈すると思われる。14は須恵器長頸瓶の胴部片である。外面にはカキメが施される。断面は赤褐色を呈する。

[時期]出土遺物・火山灰の堆積状況から9世紀代~10世紀初頭と思われる。 (中村・齊藤)

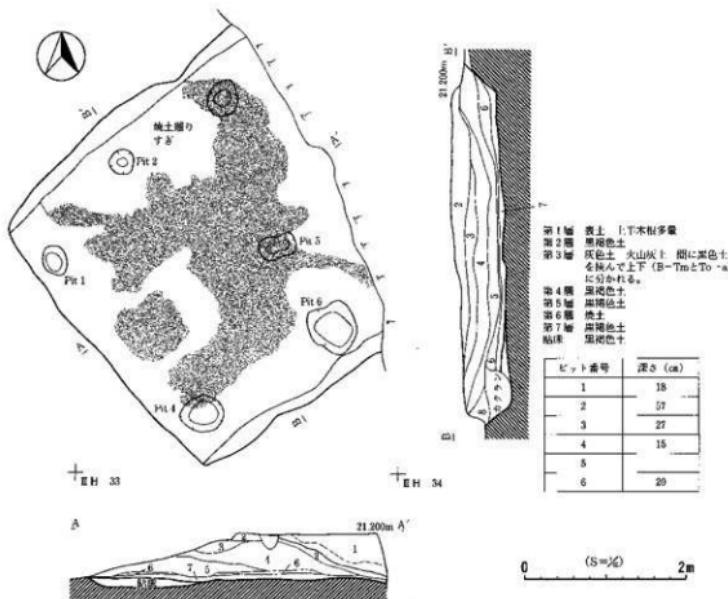
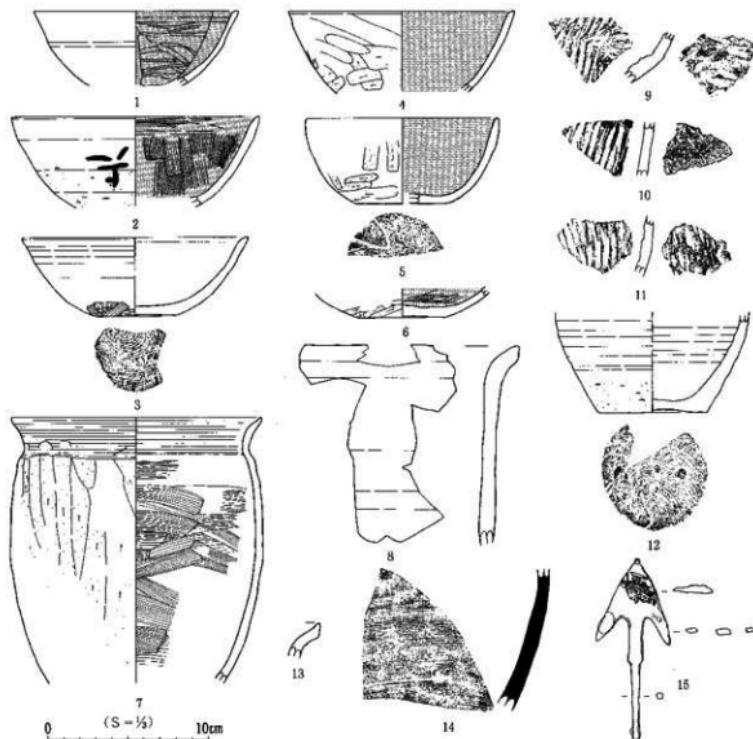


図11 第5号住居跡



図版番号	遺物名	出土場所	種別	基準	外面調整等	内面調整等	分類
12-1	S 105	4層	土師器	环	ロクロナデ	1ガキ	3
12-2	S 105	1層	土師器	环	ロクロナデ、單面	1ガキ	3
12-3	S 105	貼床	土師器	环	ロクロナデ、底邊部ヘラケズリ	ロクロナデ	4
12-4	S 105	5層	土師器	环	側上半部ユビナデ 側下半部ヘラケズリ	1ガキ	3
12-5	S 105	2層	土師器	环	体部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	1ガキ	3
12-6	S 105	床面	土師器	环	回転条切、底部ヘラケズリ	1ガキ	3
12-7	S 105	6層	土師器	環	11縫部ヨコナゲ 体部ヘラケズリ	ヘナダードル縫部ヨコナゲ	3 a
12-8	S 105	1層	土師器	環	ロクロナデ	ナゲ	4 a
12-9	S 105	1層	土師器	環	タタキ	当其相	4 b
12-10	S 105	5層	土師器	環	タタキ	当其相	4 b
12-11	S 105	2層	土師器	環	底辺回転条切	ロクロナデ	4 a
12-12	S 105	6層	土師器	環	底辺回転条切	ロクロナデ	4 a
12-13	S 105	1層	土師器	環	ロクロナデ	ロクロナデ	4 a
12-14	S 105	2層	田器器	環	ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ	

図版番号	遺物名	出土場所	種別	計測値				分類
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
12-15	S 105	床面	環	11.2	4.6	0.5		

図12 第5号住居跡出土遺物

## 第7号住居跡 [SI07] (図13、写真13)

[位置] II L・M-28・29グリッドに位置する。

[確認] II b～III層中で確認した。

[重複]認められなかった。

[平面形・規模]方形を呈し、東西で長さ3m60cmをはかる。

[壁・床面]第III・IV層を床面とする。

[周溝]検出されなかった。

[ピット]床面から13個のピットが検出された。新旧が認められ、ピット1～9が旧段階、ピット1～3・5・6、10～13が新段階のものである。

[カマド]煙道部が東壁の北寄りに検出された。新旧が認められ、南側の煙道が新しい。袖・火床面は残存していない。

[堆積土]5層に細分された。

[出土遺物]堆積土中から土師器片が出土した。

[時期]本住居跡に伴う遺物がないため不明である。

(中村)

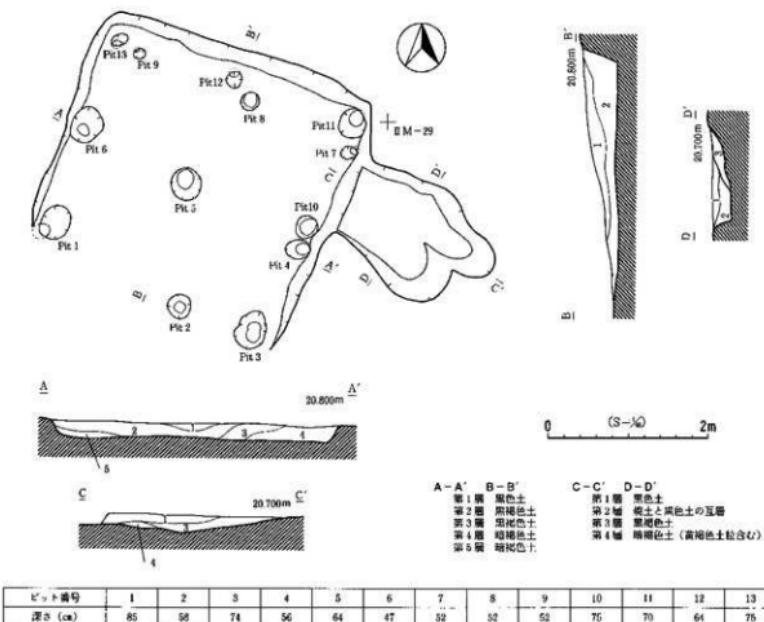


図13 第7号住居跡

## 第1号土坑 [SK01] (図14、写真15、23)

[位置] II K・L-24・25グリッドに位置する。

[確認] III層中で確認した。

[重複]認められなかった。

[平面形・規模]二重の円形を呈する。内側の円形の掘り込みは、南側に寄っている。上端は径3m15cm×2m91cmを計る。

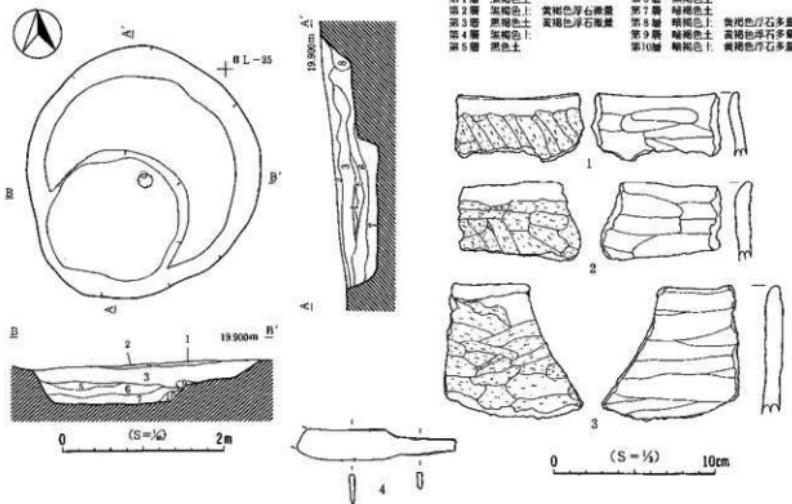
[壁・床面]IV層を底面とする。

[堆積土]10層に細分された。

[出土遺物]土師器片・鉄製刀子が堆積土から出土した。土師器は外面ケズリ・内面指ナデの口縁部の短い壘がある(1~3)。

[時期]堆積土から出土した土器により10世紀前葉以後の可能性が考えられる。

(中村)



回収番号	遺物名	出土層位	種別	特徴	外面調査等	内面調査等	分類
I4-1 SK01	1層・2層	土師器	甕	ヘラケズリ	ユビナデ		3b
I4-2 SK01	6層	土師器	甕	ヘラケズリ	ユビナデ		3b
I4-3 SK01	6層	土師器	甕	ヘラケズリ	ユビナデ		3b

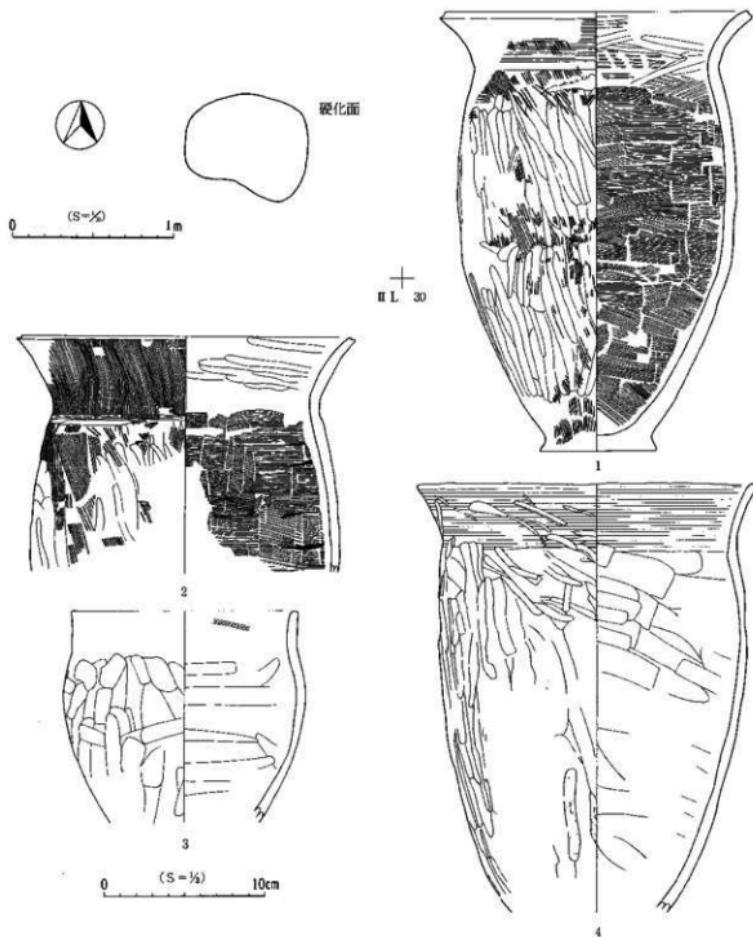
回収番号	遺物名	出土層位	種別	計測値				分類
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
I4-4 SK01	5層	刀子		9.5	1.9	0.4		

図14 第1号土坑

## 不明遺構 [SX01] (図15、写真14、23・24)

II L-29グリッドに位置する。II層を掘進中に、大型の土器片が複数出土し、その下位に硬化面が

検出された。硬化面の範囲は東西1m02cm、南北約80cmの不整形である。甕2点(1・2)、瓶2(3・4)点、琥珀片2点(写真24)が出土した。周辺には柱穴や掘り方は確認できなかったが、遺物の出土状況から掘り方が存在した可能性が高い。時期は出土した土器により占墳時代と考えられる。



組合号	遺構名	出土場所	種別	説明	外側調査等	内側調査等	分類
15-1	SX01	堆積土	土器部	甕	ハケメ→口縁部ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	1 a
15-2	SX01	堆積土	土器部	甕	ハケメ→胸部ミガキ	ハケメ→口縁部ミガキ	1 b
15-3	SX01	堆積土	土器部	甕	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	c
15-4	SX01	堆積土	土器部	甕	口縁部ヨコナデ・ミガキ・ヘラケズリ	体部ヘラナゲ→口縁部ヨコナデ	a

図15 不明遺構

## 第2節 古代以外の遺構と遺物

### 第2号土坑 [SK02] (図16、写真17)

[位置] II F - 28グリッドに位置する。

[確認] III層中で確認した。

[重複]認められなかった。

[平面形・規模] 1m50cm × 1m60cmの円形を呈する。

[底面・壁] IV b層を底面とし、平坦である。

[堆積土] 12層に分層された。壁の崩落が認められ、自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 繩文土器の細片1点、石匙1点(1)が出土した。

[時期] 本遺構に伴う遺物がないため、不明である。

(中村)

### 第1号溝状土坑 [SV01] (図16、写真16)

[位置] II L - 26・27グリッドに位置する。

[重複]認められなかった。

[確認] III層中で確認した。

[規模・形状] 長軸3m68cm、単軸60cm、深さ約70cmを計る。

[堆積土] 7層に細分された。

[時期] 本遺構に伴う遺物がないため不明である。

(中村)

### 第2号溝状土坑 [SV02] (図16、写真16)

[位置] II N - 27・28グリッドに位置する。

[重複]認められなかった。

[確認] III層中で確認した。

[規模・形状] 長軸4m00cm、短軸で52cmを計る。

[堆積土] 6層に細分された。崩落が認められ自然堆積と考えられる。

[時期] 本遺構に伴う遺物がないため不明である。

(中村)

### 第1号焼土 [SN01] (図16、写真17)

[位置・確認等] II N - 28グリッドに位置する。

[規模・平面形] 径約40cmの円形を呈する。

[時期] 本遺構に伴う遺物がないため不明である。

(中村)

### 第2号焼土 [SN02] (図16、写真17)

[位置・確認等] II O - 29グリッドに位置する。

[規模・平面形] 径34cmの円形を呈する。

[時期] 本遺構に伴う遺物がないため不明である。

(中村)

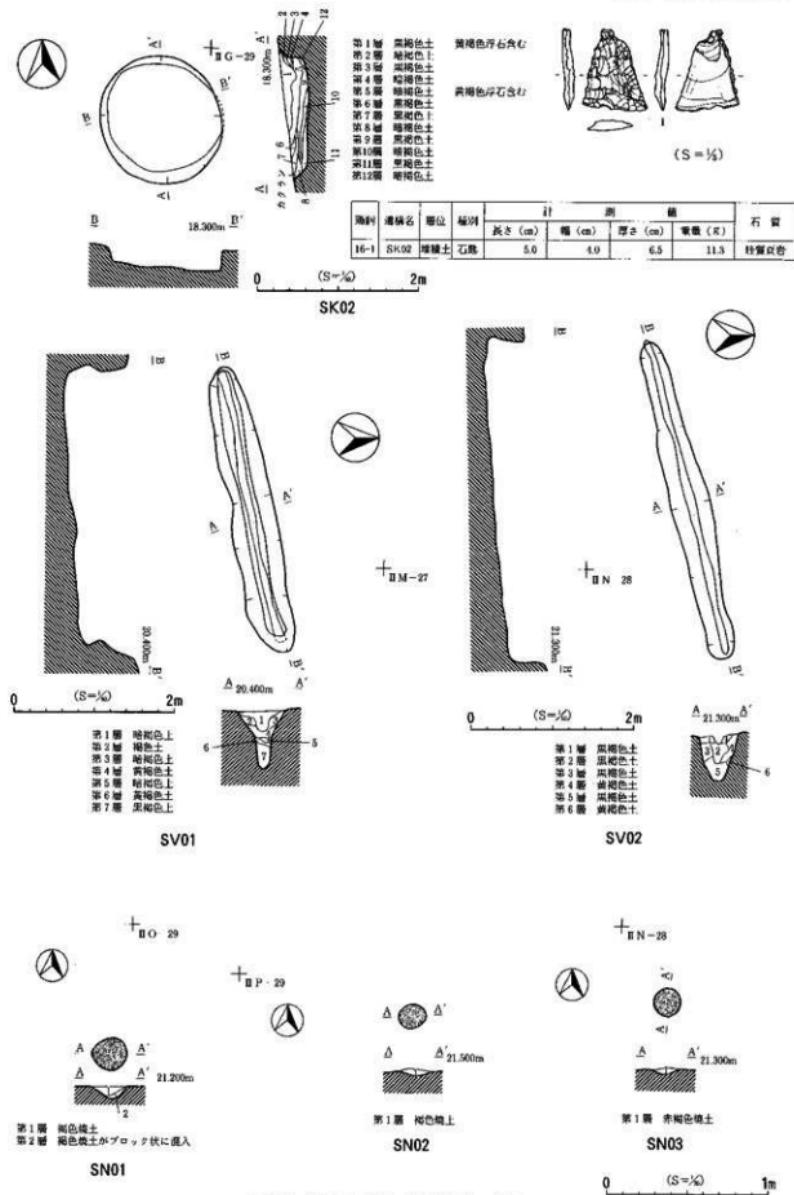


図16 第2号土坑・溝状土坑・焼土

## 第4号焼土 [SN03] (図16、写真17)

[位置・確認等] II M-28グリッドに位置する。

[規模・平面形] 径約34cmの円形を呈する。

[時期] 本遺構に伴う遺物がないため不明である。

(中村)

## 第1号溝跡 [SD01] (図17・18、写真18)

[位置] II D-2 H-26-33グリッドに位置する。

[確認] III層中で確認した。

[重複] 自然地形と思われる溝と重複し、本遺構が古い。

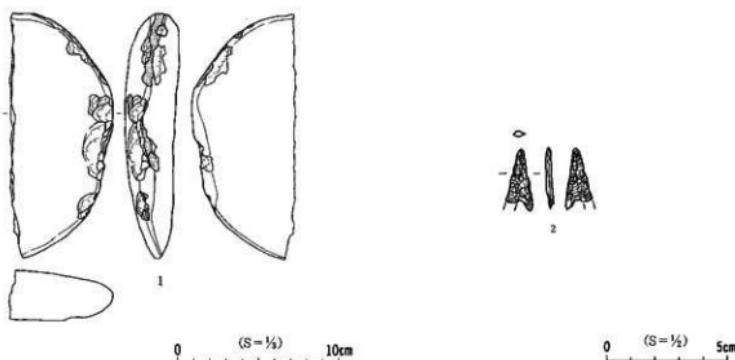
[規模・形状] 最も狭い部分で幅約70cm、広い部分で約1m40cmをはかる。

[堆積土] 崩落土等が認められ、自然堆積と思われる。B-TmとTo-aは認められなかった。

[出土遺物] 繩文土器・上師器・須恵器片が出土した。陶磁器等は出上しなかった。

[時期] 出土遺物により平安時代ないしはそれ以降と考えられる。

(中村)



回収番号	通標名	出土層位	種別	計			石質
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
17-1	SD01		無石	15.1	6.4	3.1	442.1 輝斑岩
17-2	SD01		石頭	2.5	1.1	2.5	0.5 珪質頁岩

SD-01 土層注記

A-A'  
第1層 黒褐色土  
第2層 黒色土  
第3層 黑褐色土

B-B'

SD-01  
第1層 黑褐色土  
第2層 黑褐色土 火山灰土ブロック多量  
第3層 黑褐色土 黑褐色土  
第4層 黑褐色土  
第5層 黑褐色土 火山灰土ブロック多量  
第6層 黑褐色土  
第7層 黑褐色土  
第8層 火山灰土ブロック多量  
第9層 黑褐色土自然溝  
第1層 黑褐色土  
第2層 黑褐色土 (上部より帶状強い)  
第3層 黑色土  
第4層 黑褐色土 灰白色火山灰土合む  
第5層 黑褐色土 灰白色火山灰土合む  
第6層 黑褐色土

図17 第1号溝跡 (1)

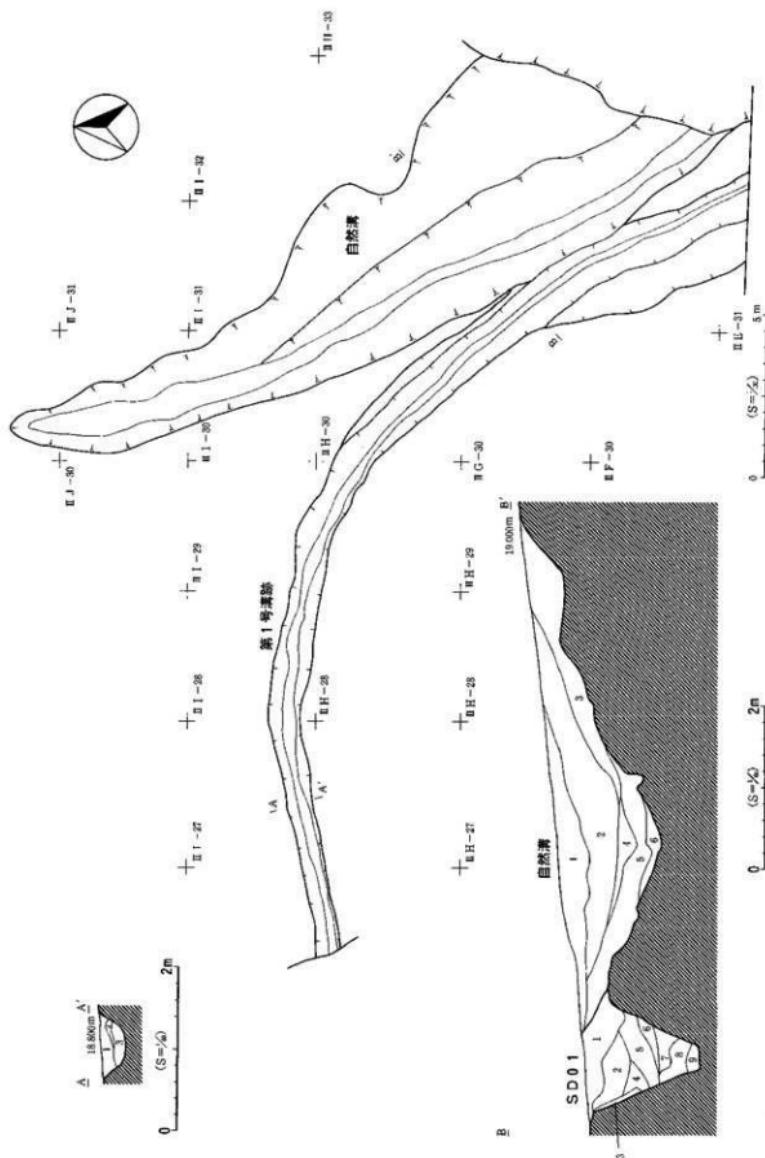


図18 第1号溝跡（2）

## 第4章 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文・弥生時代の土器・石器、土師器・須恵器、鉄器、古代～それ以後の石器、陶磁器が出土した。59cm×36cm×16.5cmの整理箱9箱分、重量にして約50.8kgである。その9割以上が土師器である。弥生時代の土器は小片のため、図示できるほどのものがなかった。

**土師器・須恵器（図19-1～10）** 1～3は外面に沈線を持つ内面黒色処理の壺で、底部は丸底風の平底となっている。7は鋸歯文を施す壺の肩部片である。肩部に段を持ち、さらに上方約1.8cmの位置に段または沈線で区画が施される。この区画間に二組の沈線を上下に半単位づつらし鋸歯文が施されている。外面はミガキ、内面はハケメ調整である。10は極めて硬質な焼成である。外面にはカキ目が施される。また、カキメを施す工具と同様の工具で刺突が施される。色調は鈍い褐色～橙色を呈しており、酸化焰焼成によるものである。

**鉄器（図19-11）** 11は、折釘である。頭頂部を叩いて折り曲げている。県内の平安時代の遺跡に見られる、頭頂部を偏平に叩きのばして折り曲げたものと異なり、そのまま折り曲げている。

**古代～それ以後の石器（図19-12）** 12は砥石である。頭部には紐掛け用の溝が巡る。

**縄文土器（図19-13～26、図20-27～45）**

**早期後半～前期前半の土器（図19-13～22）** 13は押し引き沈線により波状のモチーフを描く。口縁部は波状をなす。内面は丁寧に撫でられているが、指頭圧痕の痕跡かと思われる凹凸を残している。早稻田6類に比定される。14は先端が平たく、ややさしく立った工具で2条の沈線を施し、沈線間に同じ工具を用いた刺突列を施すものである。胎土に繊維を含むので、早期後半～前期前半のものと思われるが、型式は特定できない。15はLRのループ文を施すものである。16はRLR原体を横位回転するものである。15に胎土・調整が類似する。17～19はRLR原体を横位回転する胴部片である。胎土には繊維を含み、内面の調整は13に似る。20は段多条RL繩文を斜位に回転させたものである。21はLR繩文を施す丸底の底部片である。17～21は胎土や調整が13に類似することから早稻田6類に比定されよう。22は粗大な繩文を施す平底の底部片である。底面にも同様の繩文が施されている。

**中期前葉の土器（図19-23）** 23は円筒上層C式に比定される。貼付隆帶上にL原体の圧痕を施す。隆帶の区画内部にはヘラ状工具による刺突が密に施される。

**中期末から後期初頭の土器（図19-24～26、図20-27～45）** 24～26は曲線的な文様を充填繩文で描出している。胎土・文様から大木10式平行期のものと思われる。27は口縁部下約2.5cmの位置に平行沈線を施し、これより上を無文とし、以下に繩文を施すものである。中期末～後期初頭に比定される。28は縦位の隆帶と、これに平行する沈線に区画された磨消繩文が施される。後期初頭に比定される。29も縦位の隆帶が施されており、胎土も類似する。28に近い時期が考えられる。30は撚糸圧痕を施し、これより上を無文、以下に繩文を施す。胎土は後期の土器に近く、後期のものとして扱ったが、型式は不明である。32は波状口縁に沿う2本の隆帶とボタン状の貼付が施される。螢沢式（本間1987・1988）、馬立式（鈴木 1998）、沖付式～弥栄式（成田 1989）に相当する。33～45は繩文が施される土器である。繩文は縦位回転のものが多い。45の底面には一本越一本潜り一本送りの網代圧痕が認められる。

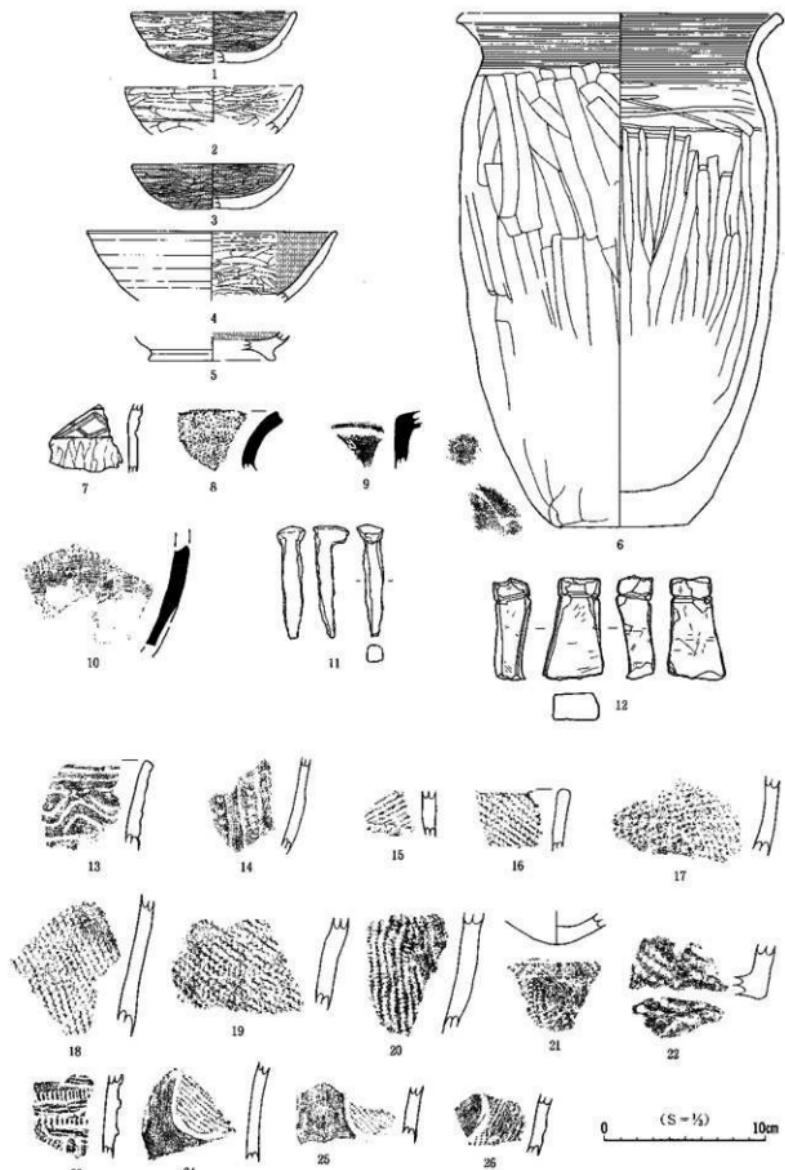


図19 遺構外出土遺物（1）

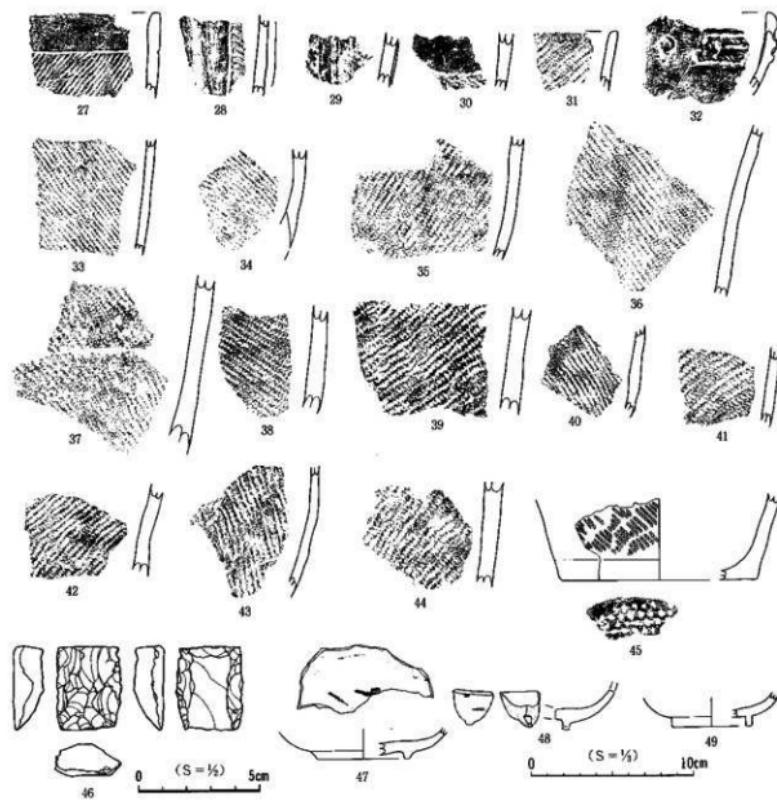


図20 遺構外出土遺物（2）

古代以前の石器（図20-46） 石鎧が1点出土した。両側縁には両面から器体整形が施され、背面には主要剥離面を残している。両側縁は平行する。刃部は片面から約45°の剥離が施されている。

陶磁器（図20-47～49）47・48は肥前系の染め付けである。49は表面に細かい貫入のみられる陶器である。

遺構外出土土器觀察表

図版番号	出土位置	出土部位	種別	容積	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外面調整等			内面調整等	分類
								計	測	値		
19-1	II K-25	カクラン	土師器	环	10.2	3.1	5.3	ミガキ			ミガキ、内面黑色處理	2 a
19-2	II K-25	カクラン	土師器	环	11.0	2.9	5.3	ミガキ			ミガキ	2 a
19-3	II E-25	カクラン	土師器	环	10.0	2.7	4.6	ミガキ			ミガキ、内面黑色處理	2 b
19-4	II K-31		土師器	环	11.5	4.3		ナデ			ミガキ、内面黑色處理	3 b
19-5	II G-28	I + II	土師器	环				7.7	ロクロナデ		ミガキ、内面黑色處理	3 b
19-6		カクラン	土師器	腹	20.2	31.7		8.1	I 縦部ココナデ ヘラナデ、布庄痕	ヘラミガキ 口縫部ココナデ	2 a	
19-7	II F-32		土師器	腹					縦部刺文、胸部ガキ	縦部ココナデ、胸部ハケメヨコナデ	5	
19-8	II F-31		土師器	腹					全面に灰付着	ロクロナデ、自然釉		
19-9	II K-31	須恵器	長颈瓶						ロクロナデ	ロクロナデ		
19-10	II H-31	カクラン	須恵器	腹					カキメ カキメ工具による刺穴	当具痕		
19-13	II O-28	II	縄文						押引線	ナデ		
19-14	II N-29	II	縄文						沈刷、ヘラ状工具による刺穴	ナデ		
19-15	II K-27	I + II	縄文						Iのループ縄文			
19-16	II M-22	II	縄文						IIの縫位回転	ナデ		
19-17	II M-29	II	縄文						LR	ナデ		
19-18	SI-5	6	縄文						RLR縫位回転	ナデ		
19-19	SI-5	6	縄文						RLR縫位回転	ナデ		
19-20	II O-30	カクラン	縄文						RL縫位回転	ナデ		
19-21	II O-30	カクラン	縄文						RL	ナデ		
19-22	II K-30	カクラン	縄文						RL縫位回転	ナデ		
19-23	II K-31	カクラン	縄文						隆帯、拂子圧痕、ヘラによる刻み			
19-24	II G-31	カクラン	縄文						沈刷、LR縫位回転	ミガキ		
19-25	II G-31	カクラン	縄文						沈刷、LR縫位回転	ミガキ		
19-26	II G-31	カクラン	縄文						沈刷、LR縫位回転	ナデ		
20-27	II F-28	I + II	縄文						I縫部刺文、RL縫位回転	ミガキ		
20-28	II F-31	カクラン	縄文						RL縫位回転、隆帯、沈刷	ミガキ		
20-29	II O-28	II	縄文						RL縫位回転、隆帯、沈刷	ミガキ		
20-30	II R-28	カクラン	縄文						RL縫系圧痕、縫位回転	ミガキ		
20-31	II R-28	カクラン	縄文						RL縫位回転	ミガキ		
20-32	II K-24	II	縄文						隆帯、ギタソウ跡付跡、隆帶上RL縫位回転	ミガキ		
20-33	II R-28	カクラン	縄文						LR縫位回転	ミガキ		
20-34	II F-28	II	縄文						LR縫位回転	ミガキ		
20-35	II G-30		縄文						RL縫位回転	ミガキ		
20-36	II C-31	カクラン	縄文						LR縫位回転	ミガキ		
20-37	II C-31	カクラン	縄文						LR縫位回転	ミガキ		
20-38	II G-31	カクラン	縄文						LR縫位回転	ミガキ		
20-39	II E-28	カクラン	縄文						HR縫位回転	ミガキ		
20-40	II L-25	II	縄文						LR縫位回転	ミガキ		
20-41	II F-32		縄文						RL縫位回転	ナデ		
20-42	II F-32	カクラン	縄文						LR縫位回転	ナデ		
20-43	SI-5	II	縄文						LR縫位回転	ナデ		
20-44	II E-28	I + II	縄文						HL縫位回転	ナデ		
20-45	SI-2	I	縄文					12.0	HL縫位回転	2~3 mmの円形の剥落目立つ		
20-47	II L-25	II	須恵器	腹				5.5	透明釉	塗付、透明釉		
20-48	II K-25	I + II	須恵器	側					染付、透明釉	塗付、透明釉		
20-49	II K-26	I + II	須恵器	柄				4.9	木灰釉、高台基内面とも無輪	木灰釉		

遺構外出土鉄器觀察表

図版番号	出土位置	出土部位	種別	計			重	考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
19-11	II J-22	II 鋼	釘		6.9		1.0	

遺構外出土石器觀察表

図版番号	出土位置	出土部位	種別	計			重	質
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
19-12	II I-24	I + II	砥石		6.2	3.6	2.0	56.2
20-46	II L-34	I + II	石器		3.4	2.7	1.2	8.8

## 第5章 考察

### 第1節 土師器について

**土師器の分類** 本遺跡から出土した土師器には壺・甕・瓶の三器種があり、形態や製作技法からそれぞれ細分が可能である。

**壺** 製作技法から4類に大別される。

1類 内外面ミガキ調整を主体とする丸底の壺。形態によってさらに三分される。

a 外面に段・内面に稜を持ち、体部から口縁部にかけて直線的に開くもの。

b 内外面に段を持ち、体部から口縁部にかけて内湾気味に開くもの。

c 底部が分厚く突出し、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるるもの。

2類 内外面ミガキ調整を施す壺で、底部は丸底風の平底ないしは平底のもの。沈線の有無によって細分できる。

a 外面に沈線を持つもの。 b 外面に沈線を持たないもの。

3類 外面調整にミガキの用いられない、底部平底のもの。

a 非ロクロ使用のもの。いずれも内黒である。

b ロクロ使用のもの。内黒・非内黒のものがある。

4類 焼成が堅緻なロクロ使用の無調整壺。

**甕** 形態・製作技法などにより5類に大別できる。

1類 最終調整がミガキ・ハケメを主体とする非ロクロのもの。底部は突出する。

a 胸部最大径が口縁部径とほぼ同じか、やや小さく、その位置は器高の中位にある。

b 胸部最大径が口縁部とほぼ同じかやや小さく、その位置は器高の1/2より下位にある。

c 胸部最大径が口縁部より大きい。

2類 最終調整がヘラナデ・ハケメ・ミガキを主体とする非ロクロのもの。ミガキの使用頻度は1類より低い。また、底部突出の度合も1類より弱い。

a 胸部最大径は口縁部とほぼ同じで、器高の中位にある。 b 胸部が球状を呈するもの。

3類 ハケメ・ミガキを用いない非ロクロの甕。

a 口縁部が比較的長いもの。体部の調整は内面ヘラナデ、外面ヘラナデ・ヘラケズリを主体とする。

b 口縁部の短いもの、外反しないもの。調整は外面はヘラケズリ、内面はユビナデを主体とする。

4類 ロクロ使用の甕。

a ロクロナデのもの。 b タタキ目を残すもの。

5類 鋸歯文の施される甕。調整はミガキ・ハケメが認められ、製作技法上1類ないし2類に含まれるが、小片のため詳細が明らかでなく別の類とした。

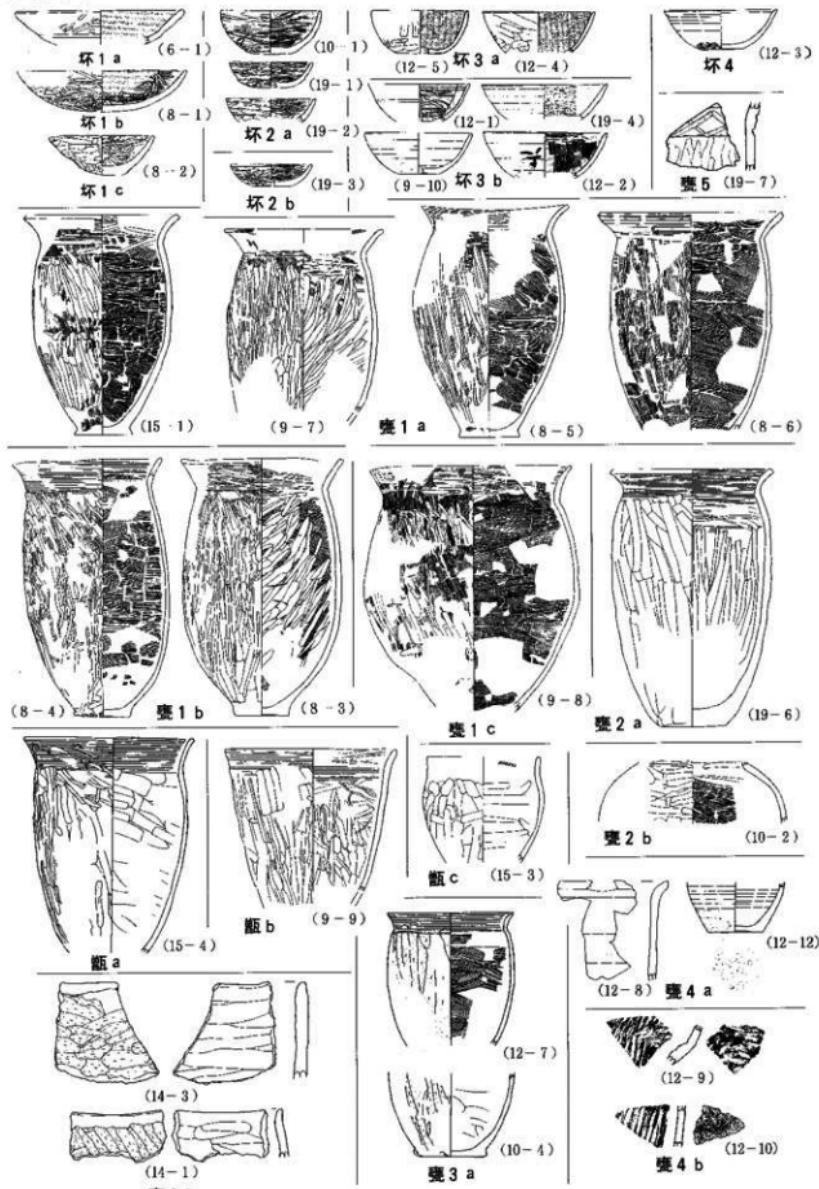


図21 土師器集成図（縮尺不同）（）内は図版番号）

**概** 制作技法上、大きな差異は認められない。いずれも無底式である。形態から3細別される。

- a 瓢と類似する形態。口縁部は外反する。胴部最大径は口縁部よりやや小さく、その位置は器高の約1/2より上位にある。
- b 底部から口縁部まで直線的に開く。
- c 脇部がやや丸みを持ち、頸部で軽く屈曲し、口縁部が真っ直ぐ立ち上がる。

**土師器の供伴関係** 本遺跡で出土した土師器の中で明らかに供伴関係にあるといえるものはSI-02出土土器のみである。SI-02からは壺1b類・1c類、甕1a類・1b類・1c類、瓶c類が出土している。SX-01は掘方や土層の堆積状態が不明ながら、甕1a類、瓶a類・c類があり、出土状況から供伴の可能性が高い。SI-05出土土器は供伴とはいえないが、多くが火山灰より下位から出土したという意味で、ある時間幅での同時性が保証されるものである。形態、製作技法の上からは、火山灰の上位から出土した遺物も大きな差はない。壺3a類・3b類・4類、甕3a類・4a類・4b類が出土している。このように遺構から出土した土器はSI-02・SI-05出土土器を中心には二大別する事が可能である。数量的に少ないため器種構成などは不明だが、これらとは供伴関係ではなく、製作技法の異なるSI03出土土器とSI04出土土器・SK01出土土器を加えて四群を認めることが可能である。

- I群 SI-02出土土器・SX-01出土土器を含む。壺1b類・c類、甕1a類・1b類・1c類、瓶a類・b類・c類が相当する。製作技法・形態からは甕1a類もこれに含まれる。
- II群 SI-03出土土器を含む。壺2a類・2b類、甕2a類が相当する。
- III群 SI-05出土土器を含む。壺3a類・3b類・4類、甕3a類が相当する。
- IV群 甕3b類が相当する。

#### 各群土器の年代

I・II群土器はいわゆる桜井第I型式に、III・IV群土器は桜井第II型式に相当する。東北北部において桜井第I型式に相当する土師器は現在その細分が進められつつあり(関 1981、高田1981、遠藤・相原 1983)、それに伴って從来の年代観も遡上しつつある。この時期の馬淵川下流域の土器は、宇部則保氏により、壺を中心に4細別されている(宇部 1989)。本遺跡のI群(以下丹内○群のように記述)土器は、田面木平(1)遺跡の土器に類似し、そのほとんどは宇部氏のII群に相当する(以下、宇部○群のように記述)。ただし、甕1a類だけは宇部I群に相当する。宇部II群は、供伴した須恵器の年代観から7世紀中葉～後葉の年代が想定されている(宇部 1997a)。宇部I群はII群以前、すなわち7世紀前葉の年代観が想定されている。丹内I群土器もこれに相当するものである。甕5類は他遺跡の事例から丹内I群に伴うと考えられる(宇部 1997b)。

丹内II群土器は宇部III・IV群土器に相当するとと思われるが、一括資料ではなく資料数も少ないと深くは立ち入らない。宇部III・IV群土器はおおむね8世紀代の年代が想定されている。

丹内III群土器は十和田a、白頭山・苦小牧火山灰の下位からクロクロ使用の土師器が出土していることから、9世紀から10世紀初頭(火山灰より上位の遺物は10世紀前葉の可能性も否定しない)の年代が想定される。

丹内IV群土器はIII群より後出のものと思われ、10世紀前葉以後の年代を想定しておきたい。

(中村 哲也)

## 第2節 青森県の古代の琥珀について

今回の調査によって、当遺跡から7世紀中～後葉のものとみられる琥珀塊・破片が4点出土した。

本県ではこれまで、古墳時代から平安時代にいたるまでの古代の琥珀が県南地方から出土しているので、ここではそれらをまとめながら、この地域の古代の琥珀の様相について述べる。

琥珀（Amber）は松・杉・桧に代表される松柏類などの樹脂が土に埋もれて固まり、化石化したものである。光沢をもち、色調が黄色、黄色半透明または赤褐色を呈するもので、硬度が2.0～2.5と軟質で加工しやすい（この反面、ろく破碎しやすい）ことから、日本列島では旧石器時代以来、垂飾品などの装身具として用いられてきた。わが国では岩手県北部の久慈市一帯、北海道厚田村、千葉県銚子市など20数ヶ所の琥珀産地があるが、久慈市一帯にみられる白亜期の久慈層群に大規模な鉱脈があり、わが国最大の産地として現在にいたり、久慈琥珀の名で知られている。

縄文時代の琥珀は、本県では中期のものを最古として、県南地方を中心に10ヶ所以上の遺跡から出土しているが、弥生時代の例は少なく、津軽・下北地方にわずか3例知られるのみであり、県南地方からはまだ出土していない。しかし、古代の琥珀は県南地方では各所から出土しており、当遺跡例を含めて11遺跡（表：次頁）となる。このなかで最も古いのは天間林村森ヶ沢遺跡例で、古墳時代前期にさかのぼる。正式な調査報告書が未刊のため、詳細は不明ではあるが、4世紀後半とみられる土壌墓から北大式土器・櫛・刀子などのほか、石製平玉・埋木玉類とともに琥珀の勾玉・纈玉等が30点ほど出土している。ついで、やや下って7世紀中頃の琥珀が八戸市市子林遺跡から原石小塊が出土しており、時期・造構等が当遺跡のものと共通している。また、7世紀後半期以降から奈良時代にかけての琥珀は、八戸市酒美平遺跡（原石小塊・未製品）、下田町阿光坊（小玉）・八戸市根城（勾玉）・丹後平古墳（丸玉・纈玉）、八戸市一日市遺跡（破片）などにみられ、古墳から副葬品として出土する例が顕著になってくる。琥珀は、平安時代の遺跡からも出土しており、八戸市岩ノ沢平（平玉）・櫛引遺跡（小玉）のほか、最新の情報では南郷村砂子遺跡（未製品・破片）からも出土している。このように、県南地方では、古墳時代前期の4世紀後半から平安時代まで、ほぼ継続して琥珀が用いられていたことが指摘される。

この地域の琥珀には、土壌墓から出土するものと竪穴住居跡から出土するものがある。前者には製品のみがあるが、これは副葬品としての性格から当然のこととして理解される。これに対して、後者には製品よりも原石小塊・小破片が多く、加工途中のものもある。これらは、不用になったり加工中に割れたりして廃棄されたものも当然含まれていると思われるが、酒美平4号住居跡例のようにピット埋め土上部から原石小塊、住居跡底面から穿孔途中のものが出土している例があつて、住居跡で琥珀加工が行われていたことが推測されることから、琥珀塊・小破片を出土したそのほかの住居跡においても琥珀加工が行われていた可能性が想定されるものである。

ところで隣接する岩手県久慈市では大規模な琥珀産地を抱えているため、市内各所で古代の遺跡から琥珀（大半が破片）が出土しており、上野山（（財）岩手県埋文センター 1983）、中長内（久慈市教育委員会 1988・1989）、平沢I（（財）岩手県埋文センター 1988・1997）、源道（（財）岩手県埋文センター 1988）、田高I（久慈市教育委員会 1997）など諸遺跡の調査例がある。これらのうち、中長内では奈良～平安時代のほとんどすべての住居跡（34軒）から琥珀が出土している。破片のほか、原石小塊や未製品も14軒の住居跡から出土しており、琥珀の玉作り集落跡であったことが指摘されている。また、そのほかの源道でも奈良・平安時代の住居跡10軒から原石・製品が出土し、平沢Iでも小塊や未製品が14軒の住居跡から出土しており、琥珀の玉作り集落跡であったことが指摘されている。

表 青森県出土の古代の琥珀

遺跡名	出土位置	備考(時期・形状・点数・文献)
①南郷村砂子	第4号竪穴住居跡カマド	平安期、小破片1(県埋文センター2000)
	第24号竪穴住居跡堆積土	平安期、小破片少量(県埋文センター2000)
	第34号竪穴住居跡カマド	平安期、工品1・小破片1(県埋文センター2000)
②八戸市丹内	不明遺構タキ面	7C中～後葉、原石小塊・小破片各1(本書掲載)
	第1号住居跡覆土1層	7C後半か、小破片2(本書掲載)
③八戸市市子林	A地点第1号竪穴住居跡堆積土	7C中～後葉、原石小塊1(市教委1994)
④八戸市丹後平古墳	21号墳主体部	8C初頭～前葉、長円不整丸玉2(市教委1991)
	23号墳主体部	8C初頭～前葉、丸玉1(0.85g)(市教委1991)
	9号墳主体部確認面	8C初頭～前葉、東玉1(4.1g)(市教委1996)
⑤八戸市根城古墳	主体部か	7～8世紀、勾玉1(2.4cm長)(保坂1972)
⑥八戸市酒美平	3号住居跡中央部2層	7C後半～8C前半、原石小塊1(市教委1997)
	4号住居跡埋土上部・床面	7C後半～8C前半、原石小塊1、粗割り加工の両面穿孔中途品1(市教委1997)
⑦八戸市橋引	第33号竪穴住居跡床面	9C後葉～10C初頭、円筒形に近い不整球状小玉1(県埋文センター1999)
⑧八戸市 <sup>ひといき</sup> 一日市	SI-4 竪穴住居跡	奈良期、小破片少量(市教委1999)
	第6号竪穴住居跡床面	9C後半～10C後半、平玉3(市教委1992)
⑩下田町阿光坊古墳	第3号墳周溝2層	7～8C、不整小玉1(1.3g)(町教委1989)
	第6号墳周溝底面	7～8C、小玉1(1.35g)(町教委1990)
⑪天間林村森ヶ沢	10号墓	続繩文期(北大I式期、4世紀後半)、勾玉・東玉等30点以上(歴博1994)

このように、本州北辺の古代の琥珀および琥珀の玉作り遺跡は岩手県北部の久慈市一帯を中心として分布しており、その北限が県南地方ということになる。

最後に、これらの琥珀の産地についてであるが、県南地方出土の琥珀については、距離的にもっとも近い久慈一帯のものと比較すると原石や未製品などの数量は及ばないにしても、時期・出土状況、さらに赤褐色という色調が共通しており、大半は久慈市一帯で採取・加工されたものと考えられる。しかしながら、これらと時期的に共通する丹後平・根城・阿光坊古墳など琥珀を出土する県南地方の墓からは、当地域や久慈市一帯では加工された形跡がない(工房跡がない)ガラス・水晶・硬玉等の装身具も出土していることから、県南地方の古墳の装身具にはより南の大和政権の直接支配が及ぶ地域で加工された琥珀製品も含まれていたものと推定される。

(福田友之)

### 第3節 石製品について

SI-03カマド堆積土・SI-04堆積土から穿孔された粘板岩製の石製品が出土した。側縁は敲打により整形されており、擦りによるものではない。貫通孔は一部を欠失しているが、意図したものか否か、あるいは使用時の破損によるものか不明である。平面形は上端が丸まった長方形に近い形状を呈する。本県では古代の石製模造品が何例か知られている(小谷地 1997)。これまで出土したものは劍形と有孔円盤で、本遺跡のものは形状が全く異なっている。これまで県内で出土した石製模造品は多くが採集品である。発掘調査により出土したものには下田町中野平遺跡、八戸市沢里山遺跡例がある。後者は遺構外出土のため年代不明である。石質は、中野平遺跡のものが滑石製、沢里山遺跡のものが粘

板岩製である。中野平遺跡例は、報告者により5～6世紀代の可能性と、8世紀以降の可能性が提示されている。本遺跡出土石製品の年代は、SI-03の年代が8世紀代と考えられ、より古いものが混入した可能性も否定できないが、これを中心とした年代が想定できる。形状・材質の点でこれまでの出土例とは異なるので直接の比較は困難な点が多いが、今後両者の関連に留意する必要があろう。

(中村哲也)

#### 引用・参考文献

- 青森県埋蔵文化財調査センター 1999『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集  
 2000『砂子遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第280集
- 宇都則保 1989「青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川流域を中心として」『北海道考古学』第25輯  
 1997a「V 考察」『酒美平遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第73集  
 1997b「7・8世紀の沈線文土師器—青森県—」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会1997年度秋田大会資料
- 遠藤勝博・相原康二 1983「岩手県南部における所謂第I型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢Ⅰ』率楽社
- 久慈市教育委員会 1988『中長内遺跡発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集  
 1989『中長内遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集  
 1997『田高I 遺跡発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
- 国立歴史民俗博物館 1994『蝦夷の墓—森ヶ谷遺跡調査概要』
- 小谷地 繁 1997『第V章 考察』『中野平遺跡—商業用地造成工事—(第五工区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』下田町埋蔵文化財調査報告書第9集
- 御岩手県埋蔵文化財センター 1983『上野山遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化センター文化財調査報告書第67集  
 1988『平沢I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集  
 1988『源道遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第138集  
 1997『平沢I 遺跡発掘調査報告書Ⅲ』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第264集
- 下田町教育委員会 1997『中野平遺跡—商業用地造成工事—(第五工区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』下田町埋蔵文化財調査報告書第9集  
 1989『阿光坊遺跡発掘調査報告書』下田町埋蔵文化財調査報告書第1集  
 1990『阿光坊遺跡発掘調査報告書』下田町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 鈴木克彦 1998『東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・4-十腰内I式と直前型式の研究』
- 閔 豊 1981「中曾根II遺跡発掘調査報告書」
- 高田和徳 1981『北館A遺跡』『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』一戸町教育委員会
- 成田滋彦 1989『入江・十腰内式土器様式』『繩文土器大観』4
- 八戸市教育委員会 1983『史跡根城跡発掘調査報告書IV』八戸市埋蔵文化財調査報告書第9集  
 1983『史跡根城跡発掘調査報告書V』八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集  
 1988『田面木平遺跡(1)』八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書V』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集  
 1989『田面木平(1) 遺跡—八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』八戸市埋蔵文化財調査報告書34集  
 1991『丹後平古墳—八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書X』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集  
 1992『岩ノ沢平遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第46集  
 1994『市子林遺跡』『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集  
 1996『丹後平(1) 遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集  
 1997『酒美平遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第73集  
 1999『一日市遺跡』『八戸市内遺跡発掘調査報告書11』八戸市埋蔵文化財調査報告書第77集
- 保坂三郎 1972『八戸根城古墳出土品』『是川遺跡出土遺物報告書』中央公論美術出版
- 本間 博 1987・1988『繩文時代後期初頭土器群の研究(1)・(2)』よねしろ考古3・4
- 光井文行 1987『7・8世紀にみられる沈線文を持つ土器について』『紀要Ⅷ』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

## 付編 自然科学的分析

### 第1節 丹内遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

丹内遺跡では、7世紀～8世紀の集落跡が検出されている。このうち、SI02は焼失家屋であり、床面付近からは炭化材が出土している。炭化材は、その出土状況から、梁材や屋根材などの住居構築材の一部が残存したものと考えられている。

本報告では、これらの住居構築材と考えられる炭化材について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

#### 1. 試料

試料は、SI02の床面付近から出土した炭化材9点(C-1～C-9)である。

#### 2. 方法

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### 3. 結果

炭化材は、全てコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

- ・コナラ属コナラ亜科コナラ節(*Quercus* Subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科  
環孔材で孔隙部は1～2列、孔隙外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

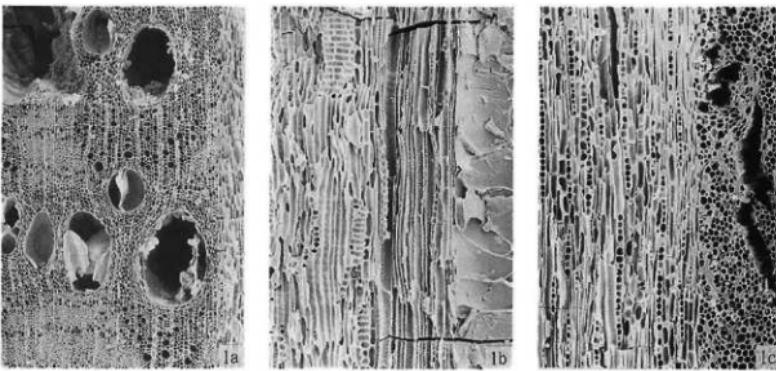
#### 4. 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、全てコナラ節であった。この結果から、住居構築材がコナラ節を主とした種類構成であったことが推定される。八戸市周辺地域では、これまでにも奈良時代～平安時代にかけての住居構築材について樹種同定が行われた例が報告されている(鳴倉、1983,1984)。これらの結果でもコナラ節は比較的多く確認されており、今回の結果とも調和的である。これらの結果から、当時本地域では住居構築材にコナラ節を主とする種類構成が広く見られたと推定される。

一方、コナラ節が全く確認されなかった報告例も知られている(鳴倉、1982,1987;三野、1986)。これらの遺跡では、コナラ節を主とする種類構成とは全く異なる種類構成が見られた可能性がある。このような違いは、関東地方などでも認められており、遺跡周辺の植生や住居の構造・用途等に起因すると考えられている(高橋・植木、1994;橋本ほか、1996)。本地域についても同様の可能性が指摘できる。今後さらに多くの調査事例を蓄積して明らかにしたい。

引用文献

- 橋本真紀夫・高橋敦・大塚昌彦（1996）群馬県榛名山東麓地域における縄文時代から平安時代の住居構築材の用材、日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集、p.92-93。
- 三野紀雄（1986）丹後谷地遺跡出土の炭化木材について、八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集「八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書II 一丹後谷地遺跡ー」、p.426-428、青森県八戸市教育委員会。
- 鶴倉巳三郎（1982）樹種同定、青森県埋蔵文化財調査報告書第67集「発茶沢遺跡 むつ小川原開発に係る幹線連絡道路建設及びバイパス施設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.383、青森県教育委員会。
- 鶴倉巳三郎（1983）鶴庭遺跡の炭化材、青森県埋蔵文化財調査報告書第76集「鶴庭遺跡発掘調査報告書」、p.106、青森県教育委員会。
- 鶴倉巳三郎（1984）和野前山遺跡から出土した炭化材の樹種、青森県埋蔵文化財調査報告書第82集「和野前山遺跡 八戸北バイパス建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.318、青森県教育委員会。
- 鶴倉巳三郎（1987）弥栄平(4)遺跡出土の炭化材樹種同定、青森県埋蔵文化財調査報告書第106集、「弥栄平(4)(5)遺跡発掘調査報告書 一むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書ー」、p.205-206、青森県教育委員会。
- 高橋敦・植木貞吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択、PALYNO、2、p.5-18



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (SI02 C-6)  
a : 木口, b : 横目, c : 板目

— 200  $\mu$ m : a  
— 200  $\mu$ m : b, c

## 第2節 放射性炭素年代測定

(株) 地球科学研究所

### 放射性炭素年代測定結果報告書

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

#### 報告内容の説明

14C age (y BP) : 14C年代測定値 試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)を計算した年代。半減期として5568年を用いた。

補正14C age (y BP) : 補正14C年代値 試料の炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定して試料の炭素の同位体分別を知り $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

$\delta\ 13\text{C}$  (permil) : 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表現する。

$$\delta\ 13\text{C} (\%) = \frac{(13\text{C}/12\text{C}) [\text{試料}] - (13\text{C}/12\text{C}) [\text{標準}]}{(13\text{C}/12\text{C}) [\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  [標準] = 0.0112372である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。

具体的には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する(Stuiver et al., 1993; Vogel et al., 1993; Talma and Vogel, 1993)。ただし、この補正是約10,000yBPより古い試料には適用できない。

#### 測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる $\beta$ -線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄 acid washes : 酸洗浄 acid etch : 酸によるエッティング

調製、その他 Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理 Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出 Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出 Extended Counting : Radiometricによる測定の際、測定時間を延長する graphite : AMS測定の際、最終的に試料を石墨に調製する benzene : Radiometricによる測定の際、最終的に試料をベンゼンに調製する

分析機関 : BETA ANALYTIC INC. 4985 SW 74Court, Miami, FL 33155, USA

測定番号	試料名	試料種	14C age (y BP)	$\delta\ 13\text{C}$ (Permil)	補正14C age (y BP)	暦年代
Beta-125405	TANNAI-1	charred material	1410±40	-27.6	1370±40	交点 AD665
						2SIGMA
						AD630 TO 705
						95%Probability
						1SIGMA
						AD650 TO 680
						68%Probability
整理番号	10050	測定方法	AMS	処理・調整・その他	acid-alkali-acid	
					graphite	

**CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS**

(Variables: C13/C12 = -27.6; lab mult. = 1)

Laboratory Number: Beta-125405

Conventional radiocarbon age:  $1370 \pm 40$  BP

Calibrated results: cal AD 630 to 705

(2 sigma, 95% probability)

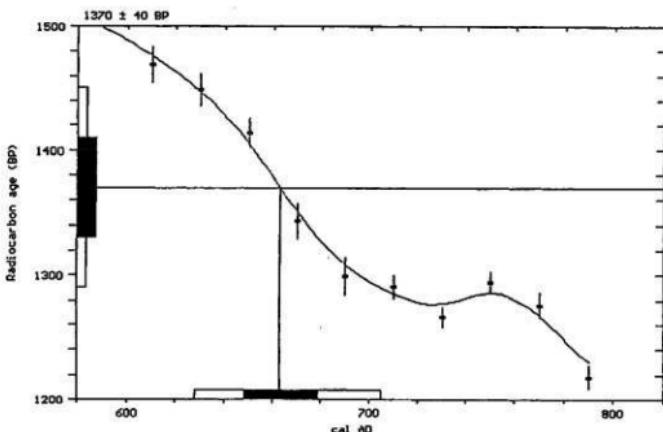
Intercept data:

Intercept of radiocarbon age

with calibration curve: cal AD 665

1 sigma calibrated results: cal AD 650 to 680

(68% probability)



## References:

Pretoria Calibration Curve for Short Lived Samples

Vogel,J.C.,Fuls,A.,Visser,E.and Becker,B.,1993,Radiocarbon 35(1),p73-86

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma,A.S.and Vogel,J.C.,1993,Radiocarbon 35(2),p317-322

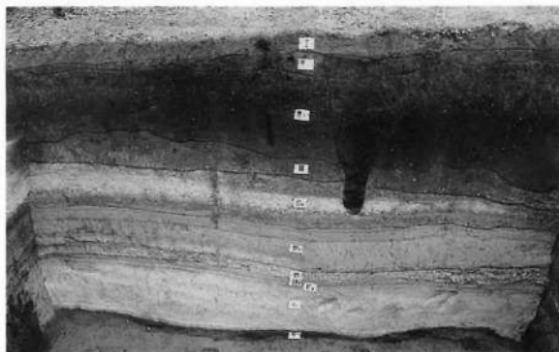
Calibration-1993

Stuiver,M.,Long,A.,Kra,R.S.and Devine,J.M.,1993,Radiocarbon 35(1)

Calibration of Radiocarbon Dates for the Late Pleistocene Using T/U<sub>h</sub> Dates on Stalagmites

Vogel,J.C.,Kronfeld,J.,1997,Radiocarbon 39(1),p27-32





1 基本層序 A  
(II 0-28グリッド)



2 基本層序 B  
(II 0-21グリッド)



3 第1号住居跡確認  
(南東から)



4 第1号住居跡土層断面  
(西から)



5 第1号住居跡琥珀  
出土状況



6 第1号住居跡完掘  
(南東から)



7 第1号住居跡鉄萍  
出土状況



8 第1号住居跡鉄萍  
出土状況



9 第2号住居跡土層断面  
(北から)



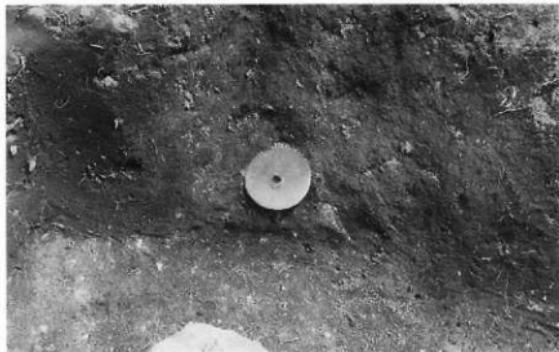
10 第2号住居跡土層断面  
(東から)



11 第2号住居跡炭化材検出  
状況 (東から)



12 第2号住居跡炭化材検出  
状況 (東から)



13 第2号住居跡土製紡錘車  
出土状況



14 第2号住居跡遺物出土状  
況（南から）



15 第2号住居跡カマド遺物  
出土状況



16 第2号住居跡カマド  
遺物出土状況



17 第2号住居跡カマド  
遺物出土状況



18 第2号住居跡カマド  
火床面断面



19 第2号住居跡カマド完掘



20 第2号住居跡完掘  
(南東から)



21 第3・4号住居跡土層断面  
(南東から)



22 第3・4号住居跡土層断面（東から）



23 第3号住居跡カマド土層断面



24 第3号住居跡カマド完掘



25 第3号住居跡遺物出土状況



26 第3号住居跡カマド袖石掘方



27 第3号住居跡カマド袖石

28 第3・4号住居跡完掘  
(南から)



29 第4号住居跡遺物出土状況



30 第4号住居跡 鐸・石製品・炭化物出土状況





31 第4号住居跡カマド断面



32 第5号住居跡火山灰検出  
状況



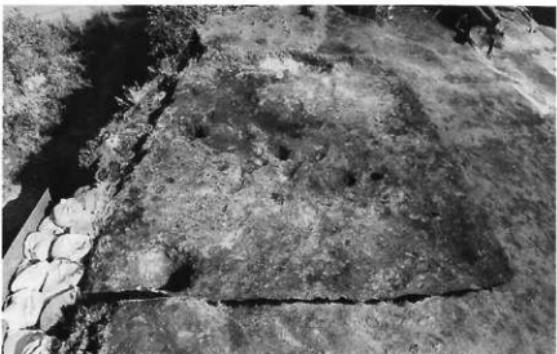
33 第5号住居跡土層断面  
(西一東)



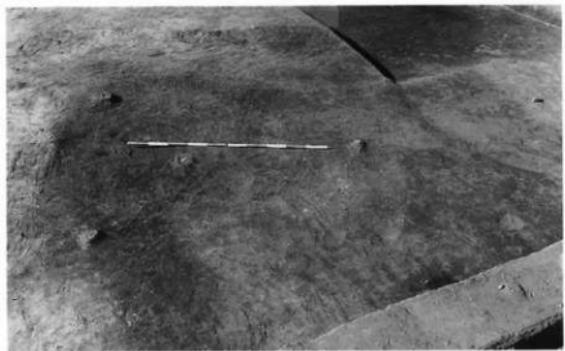
34 第5号住居跡焼土検出状況



35 第5号住居跡鉄礫出土状況



36 第5号住居跡完掘  
(北西から)



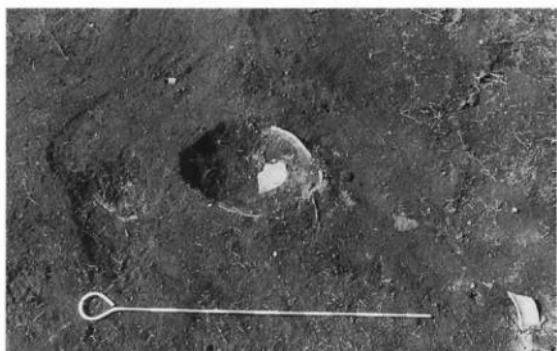
37 第7号住居跡確認  
(南から)



38 第7号住居跡土層断面  
(西から)



39 第7号住居跡土層断面  
(南から)



40 不明遺構遺物出土状況



41 不明遺構遺物出土状況



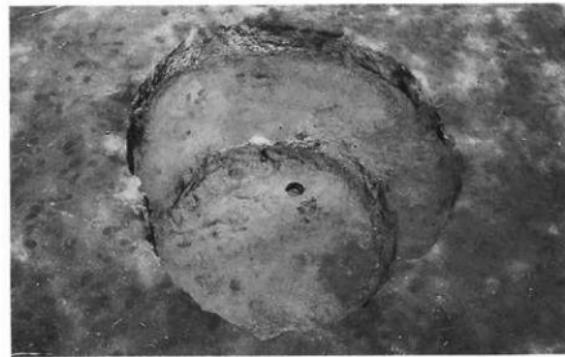
42 不明遺構遺物出土状況  
(南西から)



43 第1号土坑土層断面  
(南から)



44 第1号土坑土層断面  
(西から)



45 第1号土坑 (南から)



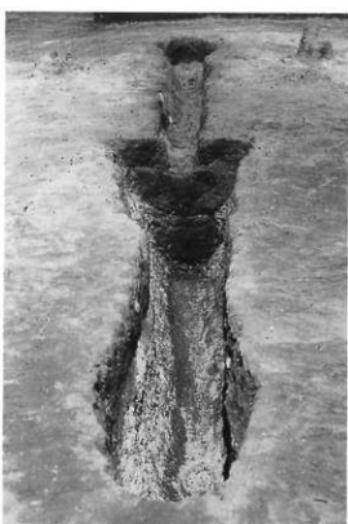
46 第1号溝状土坑（西から）



47 第1号溝状土坑土層断面（西から）



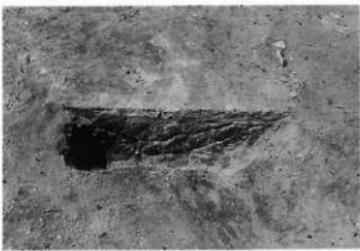
48 第2号溝状土坑（西から）



49 第2号溝状土坑土層断面（西から）



50 第1号焼土



51 第1号焼土断面



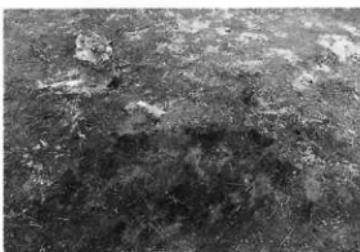
52 第2号焼土



53 第2号焼土断面



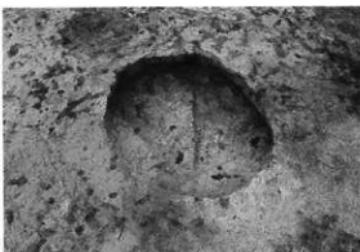
54 第4号焼土



55 第4号焼土断面



56 第2号土坑土層断面（西から）



57 第2号土坑（南から）



58 第1号溝跡（西から）



59 第1号溝跡土層断面（西から）



60 第1号溝跡（南から）



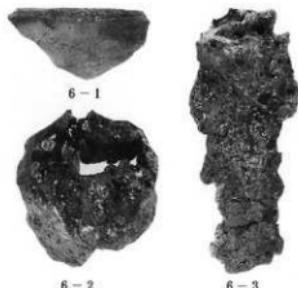
61 第1号溝跡土層断面（南から）



62 遺跡遠景（松館川対岸の段丘から）



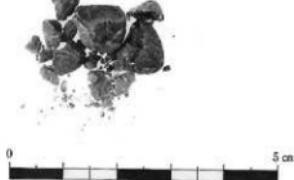
63 遺跡遠景（松館川対岸の段丘から）



第1号住居跡



第2号住居跡



第1号住居跡 琥珀





8-4



8-6



9-7



9-8



9-11



9-12 (1/2)

写真図版 21

9-10

第2号住居跡



9-9

第2号住居跡



10-1



10-2



10-3 (½)

10-4 (¾)

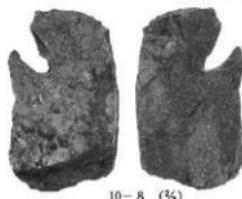
第3号住居跡



10-5



10-6



10-8 (½)



10-7

第4号住居跡



12-1



12-5



12-3



12-4



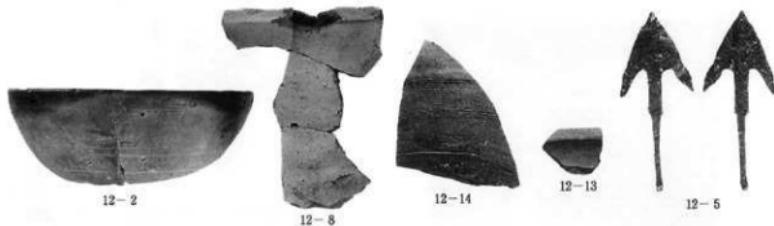
12-6



12-12 第5号住居跡



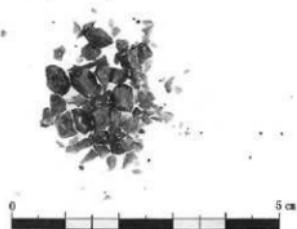
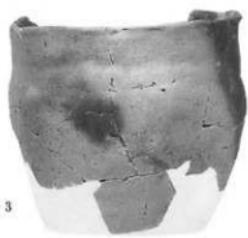
12-7



第5号住居跡



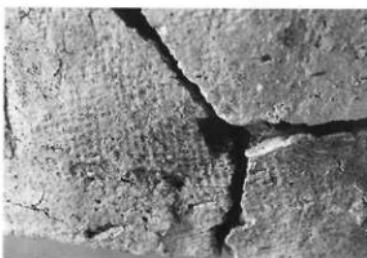
不明遺構

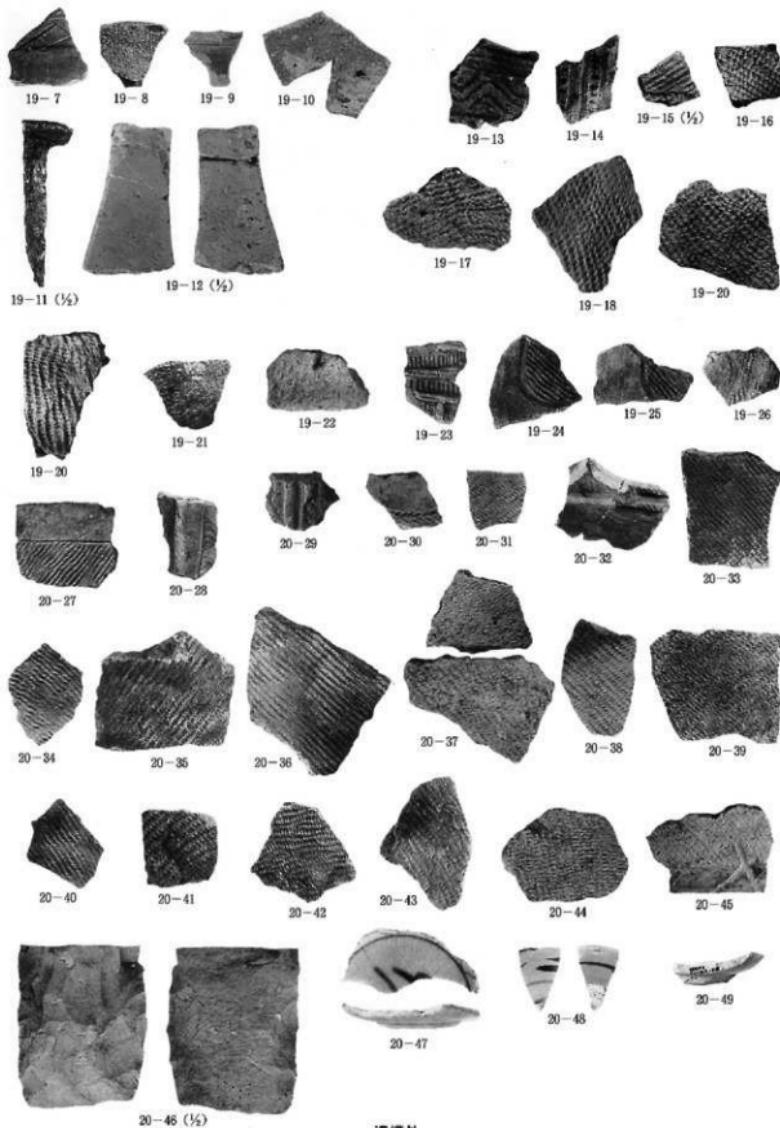


不明遺構



遺構外





遺構外



ハケメ



ミガキ



上 $\frac{1}{2}$   
下 $\frac{1}{2}$  ヘラナデ  
ケズリ

土器調整拡大

写真図版 26

## 報告書抄録

書名	丹内遺跡							
副書名	八戸南環状道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第273集							
編著者名	中村 哲也・斎藤 正・福田 友之							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 0177-88-5701 FAX 0177-88-5702							
発行年月日	平成12年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
丹内遺跡	青森県八戸市大字妙字丹内1-1-4外	02-201	03-173	40° 28' 44"	141° 30' 54"	98.04.27 98.06.12	2,300m <sup>2</sup>	八戸南環状道路建設事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
丹内遺跡	集落	古墳時代 平安時代	住居跡 住居跡 土坑	土師器 琉珀 鉄器				

**青森県埋蔵文化財調査報告書第273集 丹内遺跡**

**—八戸南環状道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—**

発行年月日 平成12年3月30日

発 行 青森県教育委員会

〒030-0801 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 所 東奥印刷株式会社

〒030-0862 青森市片川2丁目17-5

TEL 017-776-5361 FAX 017-776-5363





活彩あおもり

—輝くあおもり新時代—